

平成2年度

# 市原市内遺跡発掘調査報告

姉崎東原遺跡B地点  
南岩崎多田良遺跡  
草刈尾梨遺跡  
安久谷向ノ岱遺跡  
山田橋表通遺跡  
山木白船城跡遺跡

1991・3

市原市教育委員会



## 序 文

市原市は房総半島のほぼ中央に位置し、北に村田川、南に養老川を有する大変自然環境に恵まれた地であり、原始より多くの人々が生活を営んできました。このことは本市に残された各時代の多くの遺跡が教えてくれるところであります。

一方、市原市は首都圏に位置することから生活の拠点として重要な地域であり、交通網の整備、住宅建設など都市化への基盤整備事業が日々進んでおります。このような開発は、現代に生きる住民にとってよりよい生活環境を得るために不可欠であります。その反面、祖先の残してきた重要な文化遺産の破壊につながることもあり、文化財保護と開発との調和を図りつつこれらを後世の人々に伝えてゆく努力が必要と思われれます。

このような状況の中で、今回国庫および県費の補助を受けまして市内に存在する遺跡について調査を実施し、遺跡の性格等を把握することができました。本書はその成果をまとめたものであり、広く市民の文化財に対する啓蒙と普及に活用されることを願うものであります。

最後に、今回の発掘調査を実施するにあたりご指導・ご協力を賜りました文化庁記念物課・千葉県教育庁文化課・(財)市原市文化財センターならびに関係諸機関に対し、心から謝意を申し上げます。

平成3年3月

市原市教育委員会  
教育長 星野一郎



## 例 言

- 1 本書は国費・県費の補助を受けて市原市教育委員会が主体となり実施した市内に所在する遺跡における発掘調査の報告である。
- 2 発掘調査及び整理事業は文化庁の国庫補助事業として補助金を受けた市原市教育委員会の依頼により、財団法人市原市文化財センターが実施し、報告書刊行については市原市教育委員会で行った。
- 3 今年度実施した発掘調査は下記のとおりである。
  - (1) あねさきひがしはら 姉崎東原 遺跡 B 地点(センター調査コード121)市原市姉崎字東原2713-3, 4, 2715-1, 2, 2714, 2716  
調査 民間事業者の宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は3587.09㎡のうち358㎡である。  
調査期間 平成2年7月9日～7月23日
  - (2) みなみいわさき たたら 南岩崎 多田良遺跡(センター調査コード122)市原市南岩崎字多田良677-10  
調査 町会自治会の町会広場整備工事に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は1255㎡のうち125㎡である。  
調査期間 平成2年7月24日～7月31日
  - (3) くさかり おなし 草刈尾梨遺跡(センター調査コード125)市原市草刈字尾梨193-4, 5, 194-6  
調査 民間事業者のガソリンスタンド拡張に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は449.936㎡のうち45㎡である。  
調査期間 平成2年10月1日～10月8日
  - (4) あく やむこうのだい 安久谷向ノ岱遺跡(センター調査コード126)市原市安久谷字向ノ岱174-1, 180  
調査 個人による専用住宅建設に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は1773.76㎡のうち177㎡であり、このうち建物建築部分である226㎡に対して本調査を実施した。  
調査期間 (確認調査)平成2年10月9日～10月17日  
(本調査) 平成2年10月18日～11月7日
  - (5) やまだばし おもてみち 山田橋 表通 遺跡(センター調査コード127)市原市山田橋表通173-1 ほか  
調査 民間事業者のガソリンスタンド建設に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は1860㎡のうち186㎡である。  
調査期間 平成2年11月8日～11月27日
  - (6) やまきしらふねじょう 山木白船城遺跡(センター調査コード128)市原市山木字外白船1289-1, 3, 1290

調査 民間事業者の宅地造成に伴う発掘調査で、工事に先行して遺跡の範囲・状況を把握した。調査面積は850㎡のうち85㎡である。

調査期間 平成2年11月28日～12月10日

- 4 本書の原稿執筆は、忍澤成視が行った。
- 5 本書に使用した地形図は、市原市発行の1:25000市原市地形図1・2及び市原市発行の1:2500市原市地形図F-3、I-4・5、J-4・5、B-7、C-7、J-6、K-6、D-5、B-5、C-5である。
- 6 本書では調査範囲と遺構配置図及び遺構平面図中の北は磁北を示し、遺構平面図及び段面図中の高さは対象遺跡内に仮に設定した基準杭の高さとの相対値で示すこととする。

# 本文目次

序文

例言

財団法人市原市文化財センター組織表

第1章 調査遺跡の位置と環境	1
第2章 姉崎東原遺跡B地点	5
第3章 南岩崎多田良遺跡	9
第4章 草刈尾梨遺跡	13
第5章 安久谷向ノ岱遺跡	16
第6章 山田橋表通遺跡	27
第7章 山木白船城跡遺跡	35

# 挿図目次

## 調査遺跡の位置と環境

第1図 調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図 1	1
第2図 調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図 2	2
第3図 調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図 3	3

## 姉崎東原遺跡B地点

第4図 姉崎東原遺跡B地点調査範囲と周辺地形図	5
第5図 調査範囲と遺構配置図	6
第6図 トレンチ出土遺物実測図	6
第7図 遺構断面図及び出土遺物実測図	7

## 南岩崎多田良遺跡

第8図 南岩崎多田良遺跡調査範囲と周辺地形図	9
第9図 調査範囲と遺構配置図及びトレンチ出土遺物実測図	10
第10図 遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	11

## 草刈尾梨遺跡

第11図	草刈尾梨遺跡調査範囲と周辺地形図	13
第12図	調査範囲と遺構配置図及び5トレンチ断面図	14
第13図	トレンチ出土遺物実測図	14

## 安久谷向ノ岱遺跡

第14図	安久谷向ノ岱遺跡調査範囲と周辺地形図 及び南総中学遺跡の弥生時代遺構配置	17
第15図	調査範囲と遺構配置図	17
第16図	1号遺構平面・断面図	18
第17図	1号遺構出土遺物実測図(その1)	18
第18図	1号遺構出土遺物実測図(その2)	19
第19図	2・3号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	20
第20図	4号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	21
第21図	5号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	21
第22図	5号遺構出土遺物実測図(その2)	22
第23図	6・7号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	23
第24図	8号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	24
第25図	9号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	24
第26図	10号遺構平面・断面図	24
第27図	11号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	24
第28図	トレンチ及び遺構外出土遺物実測図	25

## 山田橋表通遺跡

第29図	山田橋表通遺跡調査範囲と周辺地形図	27
第30図	調査範囲と遺構配置図	28
第31図	1・2・3トレンチ断面図・遺構平面図及び出土遺物実測図	29
第32図	4・5トレンチテストピット・8トレンチ断面図 及び5・9・10・11トレンチ平面図	30
第33図	2b層下部～3層上面出土遺物実測図	31
第34図	3層出土遺物実測図	32
第35図	4・5層、6層出土遺物実測図	33



第36図	3 b層(貝層中)、4・5 a層(貝層下)出土遺物実測図(5トレ a)	34
------	-------------------------------------	----

**山木白船城跡遺跡**

第37図	山木白船城跡遺跡調査範囲と周辺地形図	35
第38図	調査範囲と遺構配置図	36
第39図	トレンチ及び遺構出土遺物実測図	36
第40図	1・2トレンチ遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	37
第41図	3・5・6・7・8トレンチ遺構平面・断面図及び出土遺物実測図	38

**表 目 次**

第1表	包含層の遺物包含量比較	31
-----	-------------	----

**図 版 目 次**

図版1・6	姉崎東原遺跡B地点
図版1・6	南岩崎多田良遺跡
図版2・7	草刈尾梨遺跡
図版2・3・4・8	安久谷向ノ岱遺跡
図版4・9	山田橋表通遺跡
図版5・7	山木白船城跡遺跡

## 財団法人市原市文化財センター組織表(平成2年度)

### 役員

理事長	星野一郎(教育委員会教育長)
副理事長	栗林 繁(教育委員会社会教育部長)
常務理事	淵本 献司(専任)
理事	滝口 宏(早稲田大学名誉教授)
理事	寺村光晴(和洋女子大学教授)
理事	海上信久(姉崎神社宮司)
理事	根本正夫(市企画部長)
理事	露崎 繁(市総務部長)
理事	石井作二(市財務部長)
理事	坂本忠夫(市都市計画部長)
監事	佐久間 章(市会計課長)
監事	小宮 仁(教育委員会総務課長)

### 職員

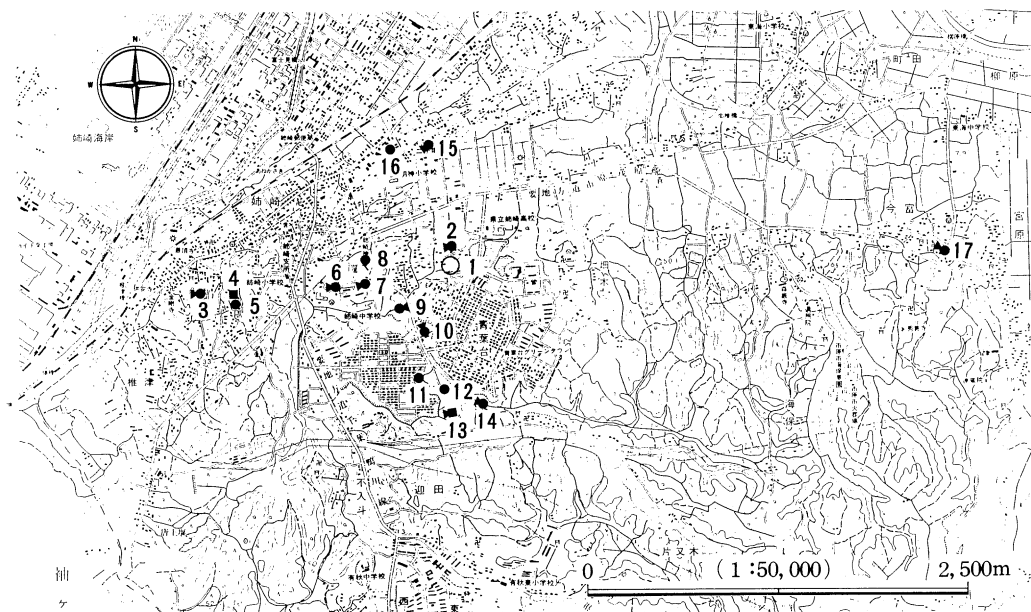
庶務課	課長	田丸 萬富
	主事	大鐘 光江
	主事	永野 健一
調査課	課長	矢戸 三男
	主任調査研究員	田中 清美
	主任調査研究員	浅利 幸一
	調査研究員	大村 直
	調査研究員	近藤 敏
	調査研究員	高橋 康男
	調査研究員	木對 和紀
	調査研究員	忍澤 成視
	調査研究員	田中 茂良
	調査研究員(嘱託)	田中 新史
	調査研究員(嘱託)	半田 堅三
	主事	高浦 貞子

## 第1章 調査遺跡の位置と環境

今年度の市内遺跡関係の調査は市域の北部3カ所、西部1カ所、南部2カ所の計6カ所でありかなり広範囲に亘るものである。今年度の対象遺跡の特徴はそのほとんどが、隣接部を既に調査されその内容が明らかにされており、今回の調査部分と密接に関係するものと思われる点である。また周辺にも少なからず今回の調査対象遺跡と関係があると思われる遺跡が多くあるので、ここではその両方を踏まえて遺跡の位置と環境の概略を述べることにする。

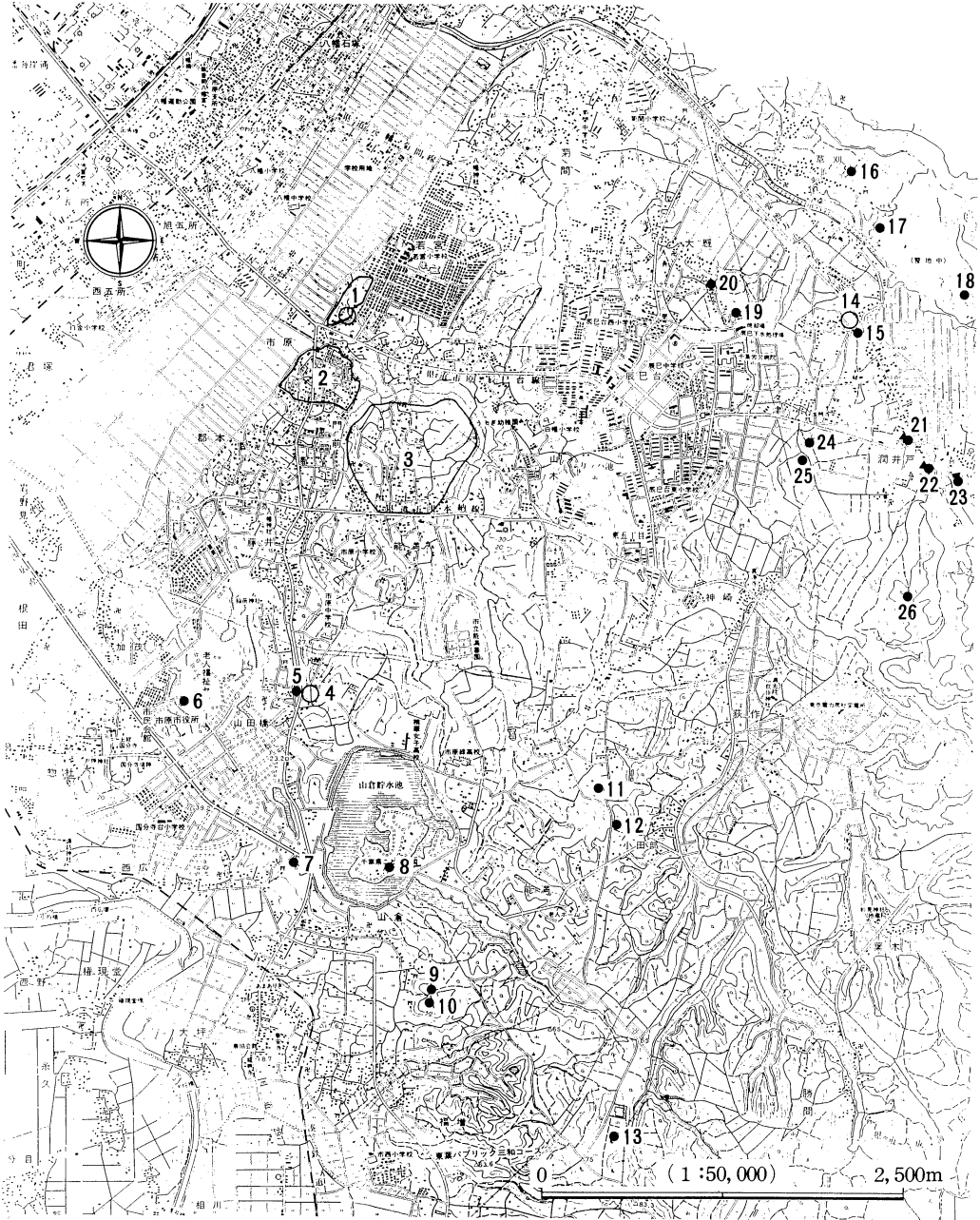
**姉崎東原遺跡B地点**(第1図-1、第4図)市の遺跡台帳には姉崎台遺跡として広範囲を一纏めにして登録してある。このなかには全長125mの前方後円墳である**姉崎天神山古墳**、消滅した**宝蔵寺古墳**、台(鬼子母神)貝塚も含まれている。今回の調査区の北東部に隣接する地点を昭和62年度に**姉崎東原遺跡**として調査しているので、対象地をB地点として区別した。遺跡は東京湾を北西に望む椎津川の形成する東側の台地上姉崎天神山古墳を北約100mに望む地点に立地する。この台地上には姉崎古墳群の大部分が存在し、県下でも有数の大規模前方後円墳の集中する地域として注目される。昭和62年度の調査では、古墳3基・弥生時代住居址3・古墳時代住居址1・時期不明住居址1が検出されており、同等時期の集落の存在が予想される。

**南岩崎多田良遺跡**(第3図-1、第8図)今回の調査遺跡の中では唯一隣接部の調査の行われ



第1図 調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図1

1. 姉崎東原遺跡B地点
2. 姉崎天神山古墳
3. 椎津外郭古墳
4. 椎津稲荷山古墳
5. 椎津茶ノ木遺跡
6. 姉崎山王山古墳
7. 姉崎釈迦山古墳
8. 姉崎宮山遺跡
9. 姉崎鶴窪古墳
10. 姉崎原遺跡・原1号墳
11. 姉崎毛尻遺跡
12. 姉崎六孫王原遺跡
13. 姉崎六孫王原古墳
14. 青葉台堰頭古墳
15. 姉崎二子塚古墳
16. 姉崎上野合遺跡
17. 今富塚山古墳



第2図 調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図2

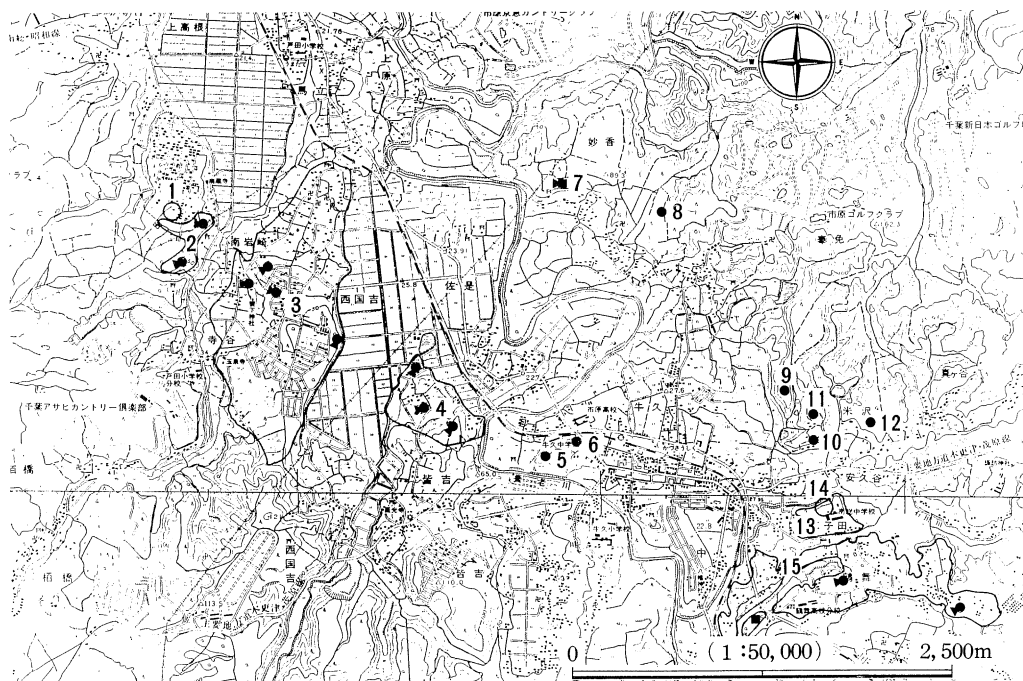
1. 白船城跡遺跡
2. 市原城跡遺跡
3. 能満城跡遺跡
4. 山田橋表通遺跡
5. 亥の海道貝塚
6. 祇園原貝塚
7. 西広貝塚
8. 山倉貝塚
9. 山倉堂谷貝塚
10. 山倉天王貝塚
11. 能満分区貝塚
12. 鳥堀込貝塚
13. 武士遺跡
14. 草刈尾梨遺跡
15. 潤井戸西山遺跡
16. 草刈遺跡
17. 草刈六之台遺跡
18. 川焼台遺跡
19. 大厩遺跡
20. 大厩浅間様古墳
21. 潤井戸杉山古墳群
22. 潤井戸山王後古墳群
23. 潤井戸小谷1号墳
24. 潤井戸居鞍古墳群
25. 潤井戸天王台古墳群
26. 下鈴野遺跡・古墳群

ていないものである。遺跡は養老川から南北にのびる支谷によって東西を切断された舌状台地のほぼ中央部に位置する。これより北側の部分は昭和40年代にほぼ全域を通称小勝山団地によ

り造成されてしまったので情報が皆無である。付近の遺跡としては同一台地上南半部に前方後円墳2基を含む20数基からなる**報恩寺古墳群**がある。今回の調査区はこれらと小勝山団地との間に位置する。さらに谷を一つ隔てて東側の台地上には、全長50mを測る前方後円墳である吉野1号墳のある50数基からなる**吉野古墳群**がある。さらに東の台地上には**佐是古墳群**があり、養老川中流域左岸台地上の古墳群を形成している。南岩崎の台地上に考古学的な調査のメスが入るのは今回が初めてである。南側に展開する古墳群に関する遺跡があるか否か興味もたれる。

**草久尾梨遺跡**(第2図-14. 第11図)村田川左岸中流域の台地上標高14mに遺跡は立地する。昭和59年度に南東に隣接する地区を**潤井戸西山遺跡**として調査し、弥生時代中期の環壕集落の一部、古墳時代の集落、歴史時代の住居・掘立柱建物・四脚門を伴う柵列塀などが検出されており、今回の調査対象地域にも同時期の遺跡の存在が期待される。さらに周辺の遺跡としては、村田川を挟んで対岸の台地上、支谷を挟んで西側の台地上、さらに南側の台地上に弥生時代中期を主体とする集落・古墳群・古墳時代の集落を主体とする遺跡が集中している。

**安久谷向ノ岱遺跡**(第3図-14. 第14図)養老川中流域右岸で養老川とその支流内田川・石川川に囲まれた丘陵上には数多くの遺跡が存在することが古くより知られているが、小支谷を挟んで北側の台地上はその一帯が**江古田上原台遺跡**(通称**南総中学遺跡**)としてとらえられる。今



第3図 調査対象遺跡周辺の主な遺跡分布図3

1. 南岩崎多田良遺跡
2. 報恩寺古墳群
3. 吉野古墳群
4. 佐是古墳群
5. 牛久石茶坂古墳群
6. 牛久古墳群
7. 妙香古墳群
8. 奉免古墳群・上原台遺跡
9. 米沢境部田岱古墳群
10. 米沢稲荷台古墳群
11. 中岱古墳群
12. 真福寺台古墳群
13. 江古田上原台遺跡(南総中学遺跡)
14. 安久谷向ノ岱遺跡
15. 江古田遺跡(江古田古墳群)

回の対象遺跡はこの一部にあたる。南側の台地はその一帯を江古田遺跡(江古田古墳群)として市の遺跡台帳には登録されるが、この中には金環塚(瓢箪塚)古墳・女坂1号墳・富士台古墳などを含む古墳群、弥生時代後期から古墳時代前期の集落の一部である雪解沢遺跡などが存在する。周辺の遺跡としては北から妙香・奉免・米沢の一帯に古墳群が連なり、江古田周辺のものに合わせて養老川中流域右岸の古墳群を形成している。さて南総中学遺跡は昭和47年に中学校建設に先行して発掘調査されたが、今回の調査区は中学の北辺のフェンスを隔てて隣接する地域で地形的には、現在校庭として利用されている広大な台地が西から東へ伸びる小支谷によって一端くびれる北東側の台地の一角にあたる。一般的には南総中学遺跡として一纏めにとらえられているが、今回は対象遺跡の名称を字名をとり安久谷向ノ岱遺跡とした。昭和47年の調査では主として弥生時代の環壕集落の居住域と墓域、古墳群が明らかにされた。墓域は前述の北東側の台地上に展開することが予想され、今回の調査区がこの一部を占める可能性が高い。

**山田橋表通遺跡**(第2図-4、第29図)遺跡は村田川と養老川に挟まれた市原台地上に立地する。調査対象は昭和60年度調査区の西側に隣接する地域である。この調査では弥生時代後期から古墳時代前期の集落の一部と古代官道の一部が検出された。また隣接する遺跡として、国道297号線を隔てて西側に縄文中・後期の地点貝塚である**亥の海道具塚**がある。市の遺跡台帳ではこの地点だけをとりえているが、『千葉県の貝塚』には国道の東側つまり今回の調査範囲にも貝殻の散布する状況が指摘され両者を一つの貝塚とみなしており、この点を明らかにすることが今回の調査の課題の一つであると思われる。また本遺跡より南側の地域には縄文中期から後期の大貝塚が数多く存在し、市原市の貝塚を考えるうえでの最重要地域となっている。

**山木白船城跡遺跡**(第2図-1、第37図)西方約2kmに東京湾を望む標高約20mの独立丘陵上に遺跡は立地する。過去4回にわたる調査の結果城郭北端部の主郭・帯郭・腰郭を確認した。今回は台地が南端部にやや突出する部分の調査で、城郭の構造上いかなる意味をもった場所であるのか興味もたれる。周辺の遺跡としては、南方約200mに**市原城跡**、南東約800mに**能満城跡**がある。

## 文 献

- 市原市教育委員会 『千葉縣市原市埋蔵文化財分布地図 北部編・南部編』1988  
高橋康男 「姉崎東原遺跡」『市原市文化財センター一年報昭和62年度』1990  
清藤一順 「吉野1号墳・南岩崎吉野遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』1988  
鈴木英啓 『潤井戸西山遺跡』(財)市原市文財センター1986  
市原市教育委員会 『上総 江古田金環塚古墳』1985  
金丸 誠 『市原市雪解沢遺跡』(財)千葉県文化財センター1984  
市原市教育委員会 『千葉・南総中学遺跡』1978  
近藤 敏 「山田橋表通遺跡」『市原市文化財センター一年報昭和60年度』1985  
千葉県文化財保護協会 『千葉県の貝塚』1983  
近藤 敏 「白船城跡遺跡」『昭和63年度市原市内遺跡群発掘調査報告』1989

## 第2章 姉崎東原遺跡B地点

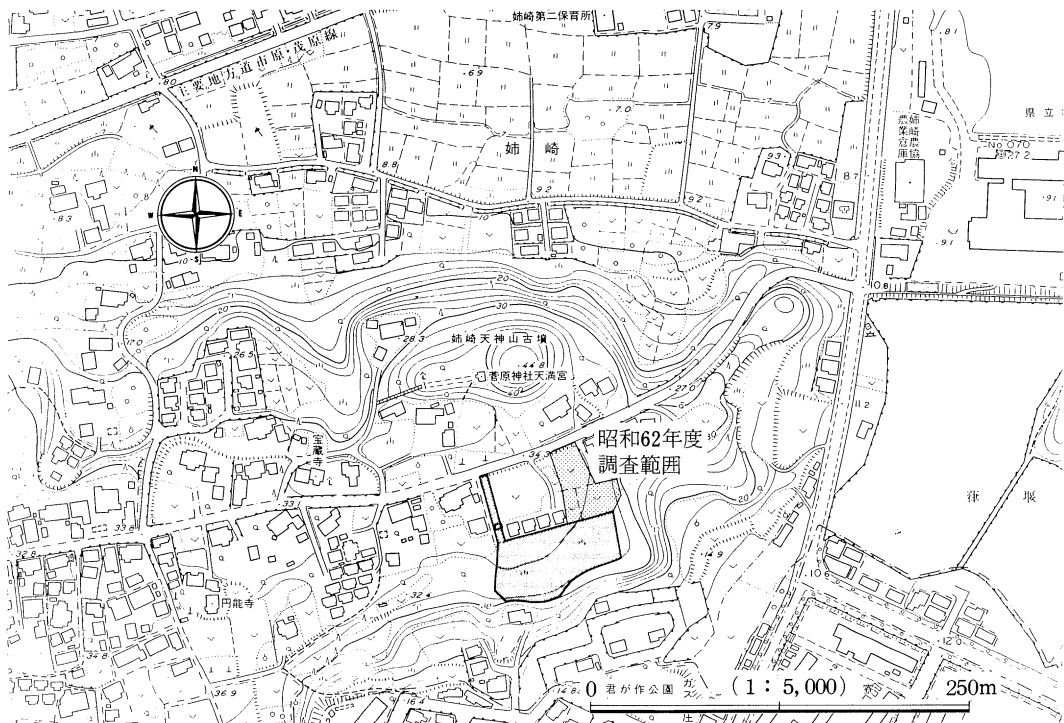
### 調査方法(第5図)

6本のトレンチと6カ所のグリットを任意に設定し、遺構確認面まで掘り下げたうえで遺構の有無と性格を把握、不明確なものについてはさらにサブトレンチを入れ確認した(8カ所)。

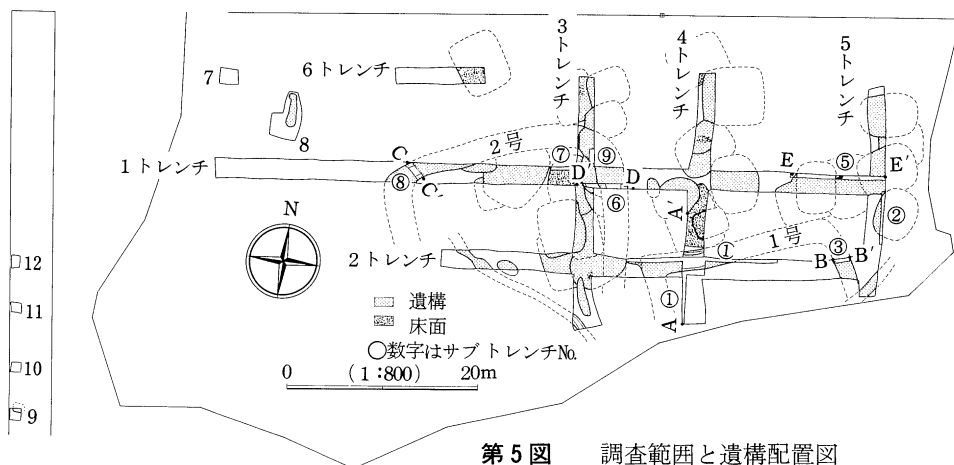
### 遺構(第5・6図)

遺構は対象地域の東側へ行くほど顕著であり、中央部ではかなりの重複が見られるものと思われる。これに対し西辺部および進入路部分にはほとんど遺構が認められないという状況であった。対象地域では全般的に表土が薄く平均20~30cm程度である。この傾向は西側へ行くほど顕著であり表土下がいきなりハードロームに達するところもある。確認された遺構は住居址28軒(このうち確認面ですでに床面の露呈するもの7軒)、土壇4基(うち1基は炉穴の可能性はある)、古墳2基、溝3条である。

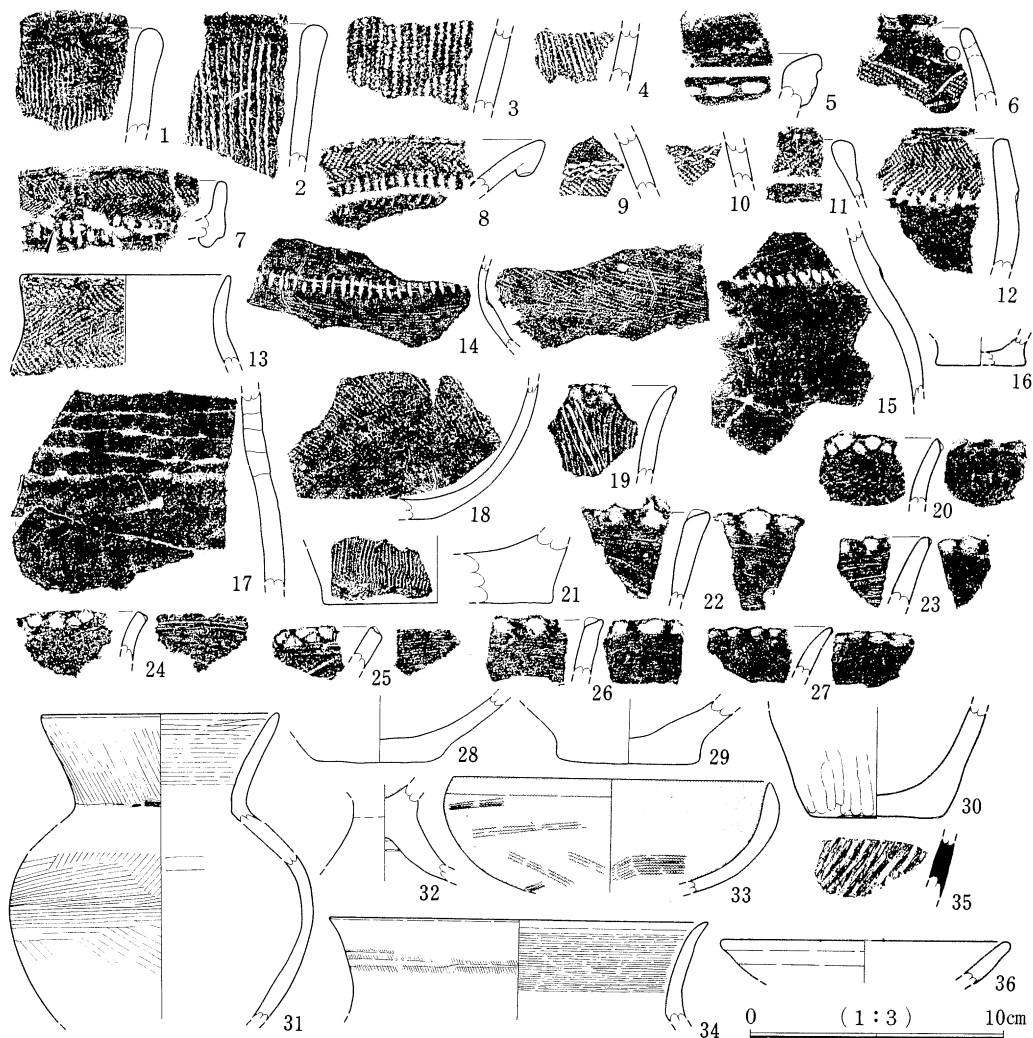
1号墳は一辺約20mの方墳で、周溝は幅2m深さ50cmを測る。2号墳は一辺約25mの方墳で、周溝は幅2~3m、深さ50~90cmを測る。住居址は1トレンチの東端でその一部を掘り下げた。しっかりとした床面は一部しかとらえられなかったが、底面までは50cmほどあり何軒かの重複が想定される。



第4図 姉崎東原遺跡B地点調査範囲と周辺地形図

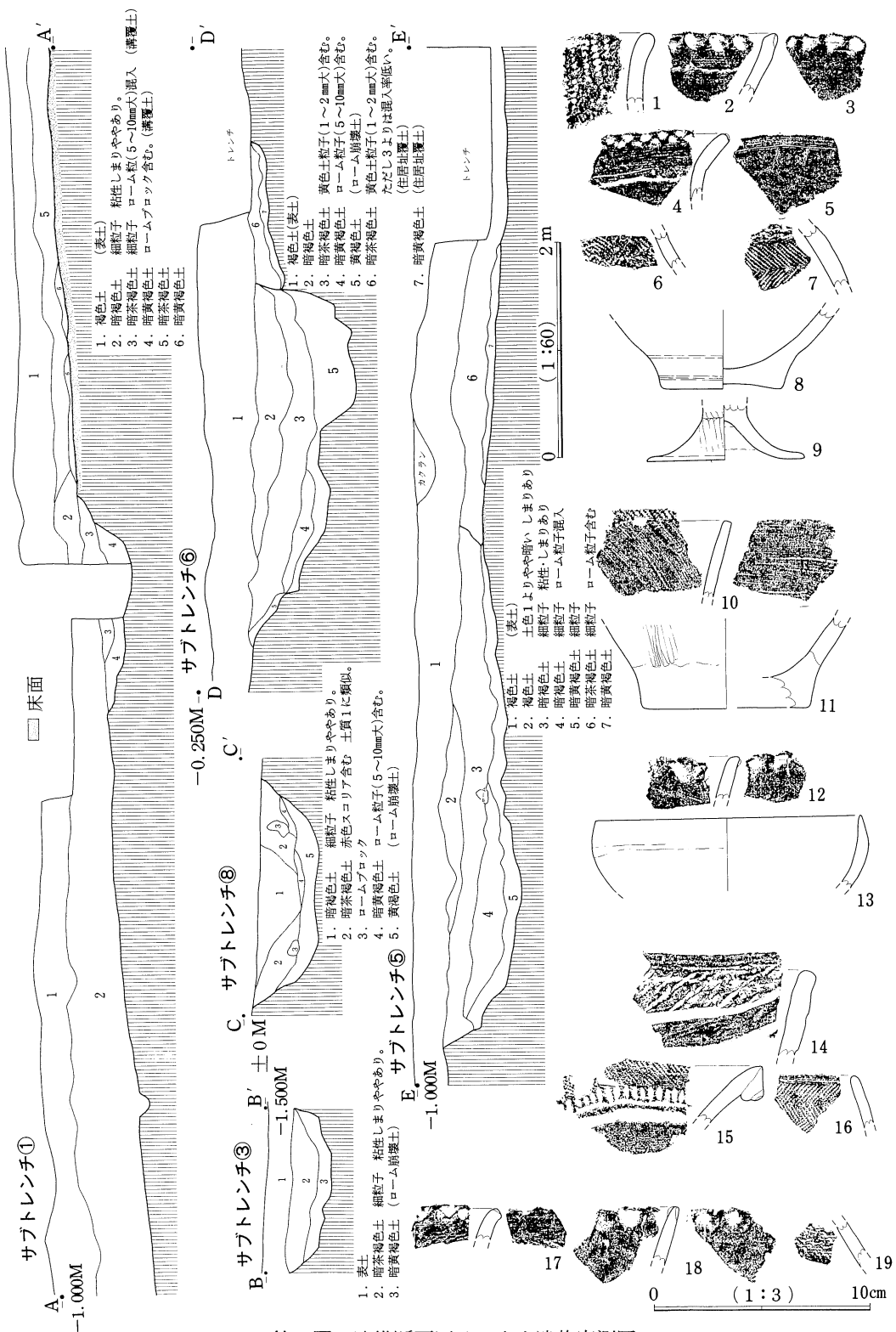


第5図 調査範囲と遺構配置図



第6図 トレンチ出土遺物実測図





第7図 遺構断面図及び出土遺物実測図

1~9(サブトレンチ①), 10・11(サブトレンチ③), 12・13(サブトレンチ⑧),  
14(サブトレンチ⑨), 15・16(サブトレンチ⑥), 17~19(サブトレンチ⑤)

## 遺物(第6・7図)

第6図にトレンチ出土の遺物を纏めた。これらは遺構確認面の上面で採集されたものであり、個々の遺構の帰属時期を断定するための材料とはならないが、遺跡の主体となる時期を推測するためには有効であろう。1～6までは縄文土器で、1～4までが早期撚糸文系土器、5は早期末頃のものであろうか、6は口縁が内傾する鉢の破片で補修孔をもつ。沈線で描かれた円孤文をもつが、区画内は磨消縄文による。後期中葉加曾利BⅢ式であろう。7～27までは弥生土器を纏めた。7～10までが壺形土器、11・12が鉢形土器、13は小型の広口壺で口径推定8.2cm、14～27は甕の破片である。31は口縁部・胴部の1/3程の破片から復元した埴で口径9.2cmである。32は高杯の脚部破片、33は1/3程の破片から復元された杯で口径12.6cmで内外ともに赤彩されている。34は口径推定15.0cmの甕である。35は須恵器の破片である。

第7図にはサブトレンチによって遺構の一部を掘り下げた際に採集されたものを纏めた。1・2号墳の周溝の一部と住居址と推定される遺構の一部のものである。しかしその数はわずかでありここで各遺構の帰属時期について述べる段階にはない。後の調査結果に委ねたい。

このように現段階ではかなり限定された断片的な資料しか得られていないが、本遺跡を弥生時代から古墳時代を主体とするものと推定する根拠とはなり得ると思われる。

## 小 結

昭和62年の調査結果同様、今回の調査対象範囲にも古墳を含む弥生時代から古墳時代の集落が展開していることが明らかになった。そして遺構確認面における住居の重複の程度からみてむしろ今回の調査範囲の側にその中心はあるようである。

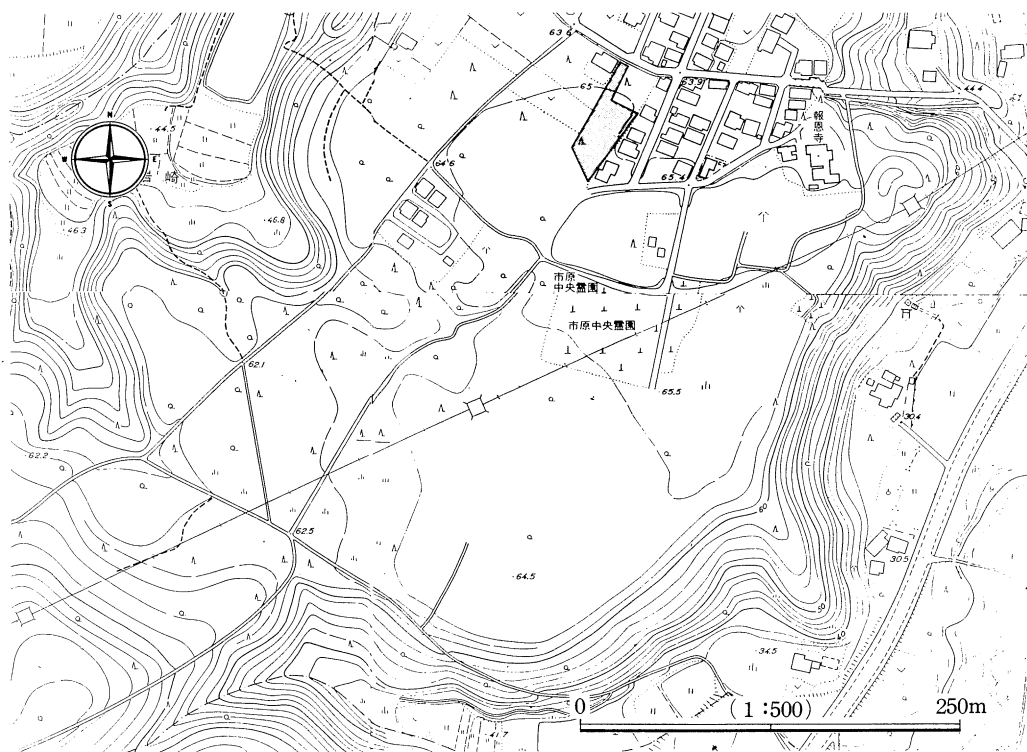
### 第3章 南岩崎多田良遺跡

#### 調査方法(第9図)

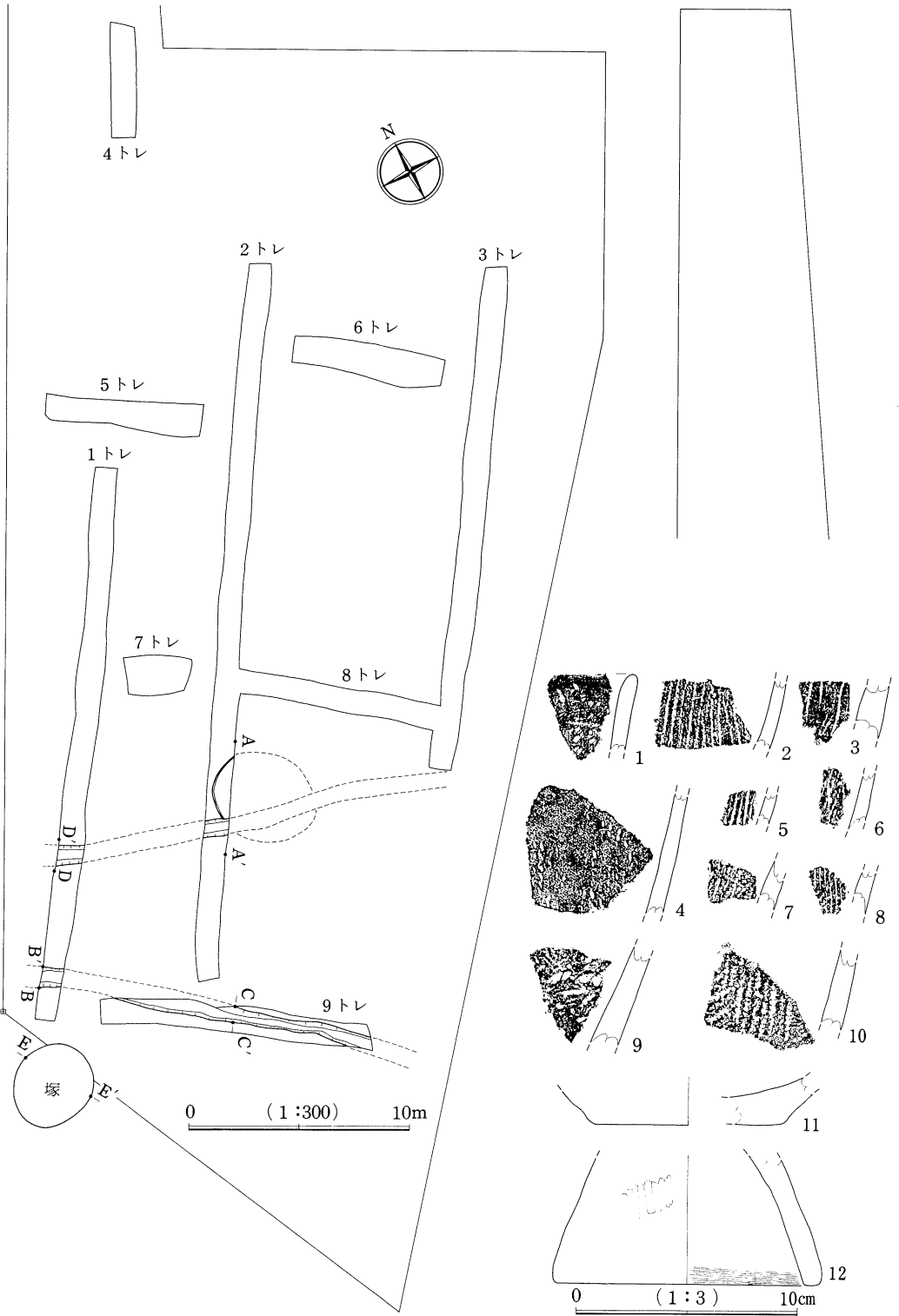
9本のトレンチを任意に設定し遺構確認面まで掘り下げ、確認された遺構はトレンチ幅で完掘し、その性格と帰属時期の把握に努めた。

#### 遺構(第9・10図)

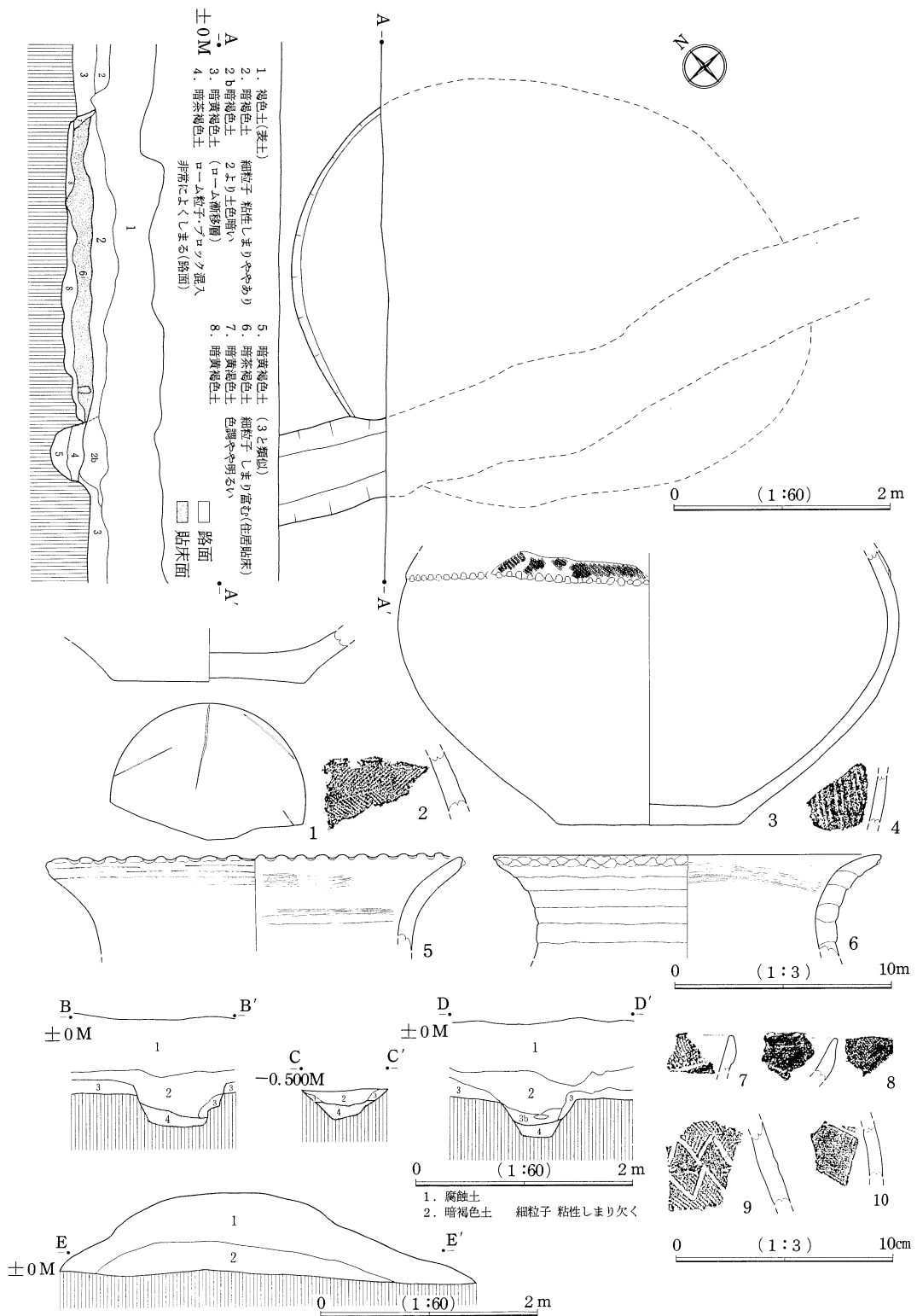
1・2・9トレンチにのみ遺構の存在が確認された。溝2条と住居址1軒である。溝はいずれも調査区の南端部を東西方向にはしるもので、幅80cm・深さ30cmと同規模である。2本の溝は全く平行に走るのではなく、東に向かうにつれて両者の間隔が広がっていく在り方をしている。いずれの溝も、覆土の中層以下が堅く踏み締められており、道として利用されていたものと見てよさそう。住居址は2トレンチにおいて溝に一部を切られるかたちで検出された。確認面から下20cmのところにはしっかりとした貼床をもちその下掘かたまでは20cmである。遺構内からは第10図に示した弥生時代後期の土器が出土しており、この住居址の帰属時期の決め手となる。溝からは数片の土器が出土しているがほとんどが弥生時代後期の土器であり、住居を壊した際に流れこんだ可能性が高い。したがってこの溝の帰属時期については、住居址よりも後



第8図 南岩崎多田良遺跡調査範囲と周辺地形図



第9図 調査範囲と遺構配置図およびトレンチ出土遺物実測図



第10図 遺構平面・断面図および出土遺物実測図 1~6(住居跡)、7~10(溝)

の何時かは判断できない。また、調査区南西隅に径約4mの塚状の高まりがあった。一部が工事範囲にかかるため、中央部付近まで半掘し断面実測した。盛土は約70cmであった。遺物は皆無であり時期は断定できなかった。

#### 遺物(第9・10図)

第9図にトレンチ出土の遺物を纏めた。1～10までは縄文時代早期撚糸文系土器である。11は甕の底部、12は台付甕の台の部分の破片で推定径12.1cmを測る。この他数点であるが焼礫をみた。

第10図に住居址とその一部を壊していた溝から出土した遺物を纏めた。1は甕の底部で底径8.8cmを測る。底面にはわずかに木葉痕を残す。3は口縁部を欠く鉢形土器で現存器高12.8cm、口縁径は推定で21.0cm程になろう。口縁部直下に帯状に粘土を貼り付けその上に単節RLの縄文を転がし、粘土帯の下部に刺突文様をめぐらす。5は甕で口縁径推定19.4cmを測る。口唇部は上下から押捺される。6も口縁径推定18.0cmの甕で、口縁下外面に輪積痕を残す。口唇部は上下からしっかりと押捺される。7・9・10は壺形土器の破片で、10は外面が赤彩されている。

**小 結** 今回の確認調査で得られた遺構・遺物はわずかであったが、縄文時代早期撚糸文系土器の時期の生活の舞台が近くに存在した可能性と、弥生時代後期の集落が調査区の北辺部にその痕跡の認められなかったことから検出された住居址より南側に展開している可能性とが指摘でき、南岩崎の台地上南半部における貴重な情報が得られたことになる。

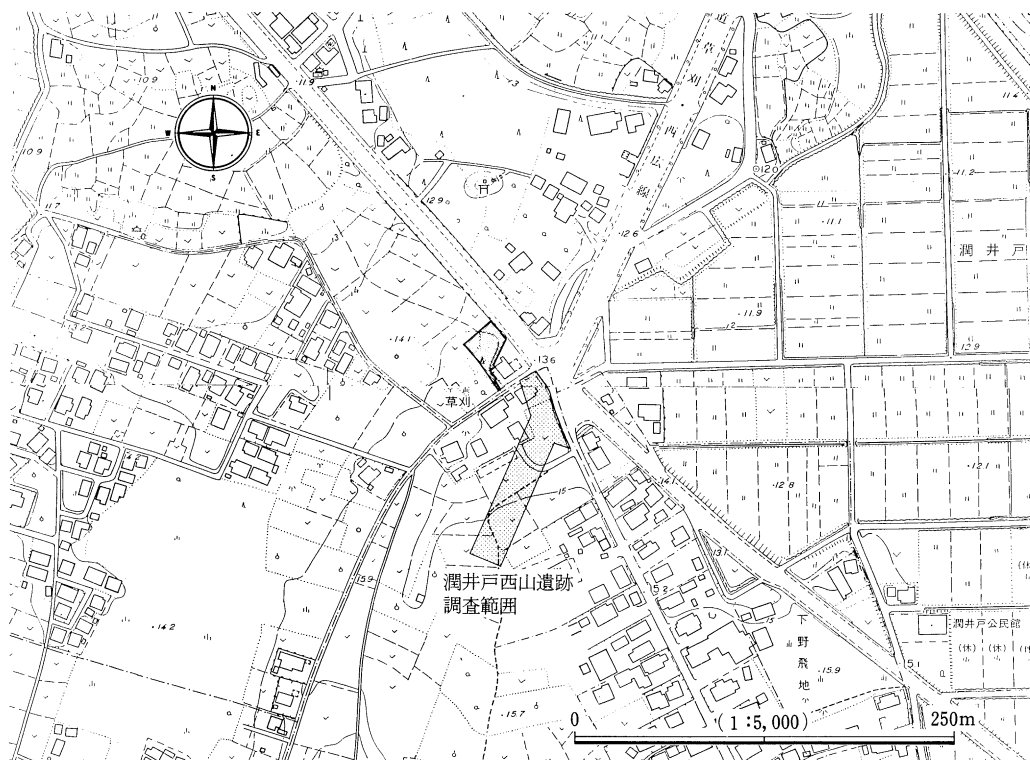
## 第4章 草刈尾梨遺跡

### 調査方法(第12図)

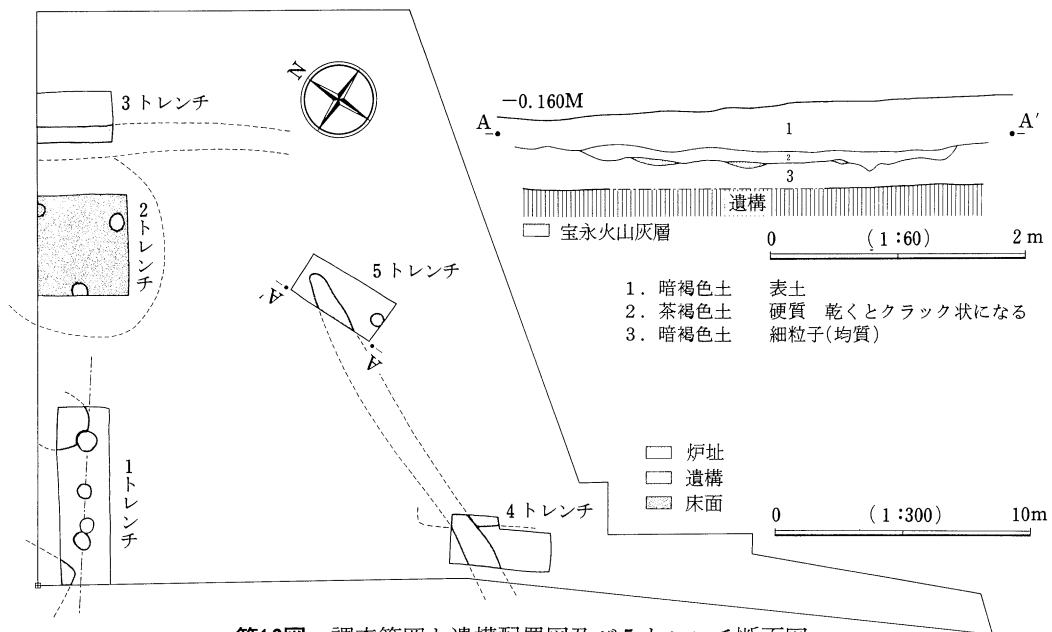
現況が大部分杉林となっており、また伐採後の倒木の処理も済んでいなかったため、調査はこれらを選けたわずかな部分に限っておこなった。特に調査区の南側部分は範囲も狭く、調査の主体は北半部に絞らざるを得なかった。設定したトレンチは5カ所であり、遺構確認面まで掘り下げたうえで遺構の有無と性格をとらえた。

### 遺 構(第12図)

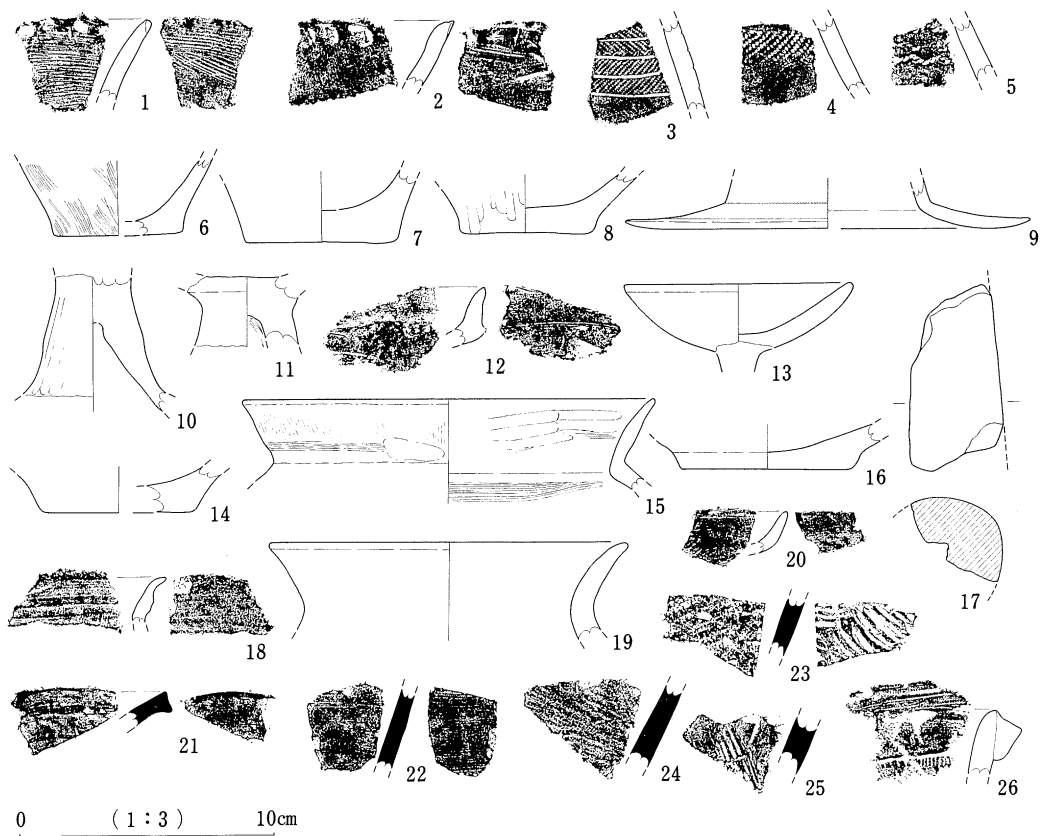
確認された遺構は住居址3軒、掘立柱建物1棟、溝2条、土壌状の落ち込み1である。住居址は1トレンチで方形のコーナー部分を、4トレンチで溝に切られる形でその一部を、2トレンチでその中央部を確認している。2トレンチの住居址は、後世の攪乱が激しくローム層にまで達し床面は所々に痕跡程度に確認されるにすぎない。しかしトレンチの範囲内で炉址の痕跡と2本の柱穴を確認している。掘立柱建物は1トレンチ内で確認された。直径約60cmほどの柱穴が2m間隔で南西から北東方向に並んでいる。これらが調査区の東に展開するのにか西に展開するのは現時点では判断しかねる。溝は3・4・5トレンチで2条確認された。1条は調査



第11図 草刈尾梨遺跡調査範囲と周辺地形図



第12図 調査範囲と遺構配置図及び5トレンチ断面図



第13図 トレンチ出土遺物実測図



区の北西から南東方向に伸び、もう1条は調査区を南から北へ走り5トレンチ内で完結している。その性格は南北にはしるものについては、トレンチ壁面の断面観察によると確認面より約20cm上に宝永の火山灰をを挟んで堅く踏み締められた面があることから道と関係する遺構である可能性もある。

#### 遺物(第13図)

出土遺物は遺構確認面の上面で採集されたトレンチ一括資料であり、これをもって各遺構の帰属時期の決定をできるものではない。しかしながら、2トレンチにおいて、弥生時代中期の土器片がややまとまる傾向があることから、この住居址の時期が当該期に求められる可能性はある。

1～7までは弥生土器である。1・2が甕、3～5が壺形土器の破片である。8～26は古墳時代各時期のものであり、遺物の主体を占める。9～11は高杯の脚部で、9は底径推定16.0cmを測り外面が赤彩されている。12は高杯の口縁部破片で内外面とも赤彩されている。13は脚部を欠損しているが口径9.1cmの器台である。15は口径推定16.4cmを測る甕である。19も甕で口径推定14.2cm。17は土製支脚の破片。18はS字口縁の台付甕の破片である。21～25は須恵器の破片である。26は埴輪破片である。

**小 結** 今回の確認調査の結果、昭和59年度調査の西山遺跡と関連する遺構の存在が明らかとなった。弥生時代・古墳時代・歴史時代各期の遺構がどのように展開し、西山遺跡の調査結果とあわせて歴史的にどのような位置付けができるのかは今後の調査に委ねられる。

## 第5章 安久谷向ノ岱遺跡

### 調査方法(第15図)

おおむね南北方向に11本のトレンチを任意に設定し、これによって遺跡の広がりを確認した後、住宅建設部分に限り全面本調査した。

### 遺構と遺物(第15図)

遺構としては本調査時に新たに発見された土壇2基を含む、住居址7軒・方形周溝墓5基・土壇7基・溝1条が検出された。各遺構とも対象区域全面に分布しており、とくにある箇所に集中する在り方は認められない。

#### 1号遺構(第16図)

一辺が推定18mの規模を持つ方形周溝墓である。溝は北西コーナーでは連結しているが北東コーナーでは途切れるものと思われる。溝の幅は1.1~1.3m、深さは0.5~0.9mを測る。

遺物は覆土中より縄文時代から古墳時代までの土器を出土しているが、2トレンチ内での溝底面に接して出土した壺形土器をもって当遺構の時期を古墳時代前期五領式期の所産とみたい(第17図-8)。胴下半部が失われているが、口径11.6cm・残存器高12.5cm。外面は口縁部にわずかに横位のハケ目を残し、頸部ハケのち縦方向にナデ、胴部は縦方向にミガキ、内面は口縁・頸部横位のミガキ、胴部下半以下ハケ目を残す。1~7は弥生時代の土器である。1は口径推定11.1cmの鉢で、口縁部は粘土はりつけ後、沈線を斜めに交差させる文様をもつ。外面の口縁部文様帯より下と内面全面に赤彩がみられる。また口縁部文様帯直下に2つの小さな貫通孔と口縁部文様帯の裏側より未貫通孔が1カ所みられる。2~4は壺形土器の破片。6は台付甕の台部の破片。5・7は木葉痕のみられる底部である。第18図には縄文時代のものを纏めた。1は早期条痕文系土器で胎土に繊維を含む、2~4は前期関山式もしくは黒浜式で全て胎土に繊維を含む。6~11までは前期諸磯b式で竹管文を主とした文様構成をとる。10・11には浮線上に刻みを加える文様がみられ、11には連続して3つの穿孔を施す。12は三角文がみられ浮島Ⅲ式と思われる。13は縦に浅い沈線が施される。前期の終わりから中期の初め頃のものと思われる。14・15は中期の土器で14は勝坂式、15は加曾利EⅢ式と思われる。

#### 2号遺構(第19図)

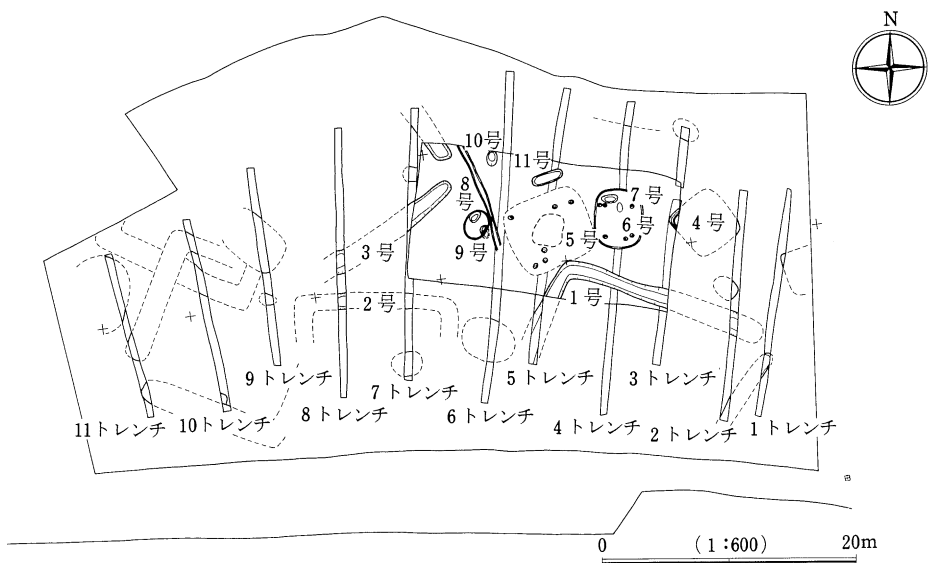
7・8トレンチにおいて確認された方形周溝墓で一辺は推定13mほどと思われる。8トレンチの確認の結果から、溝の規模は幅1.5m・深さ0.5mであることが判明している。

#### 3号遺構(第19図)

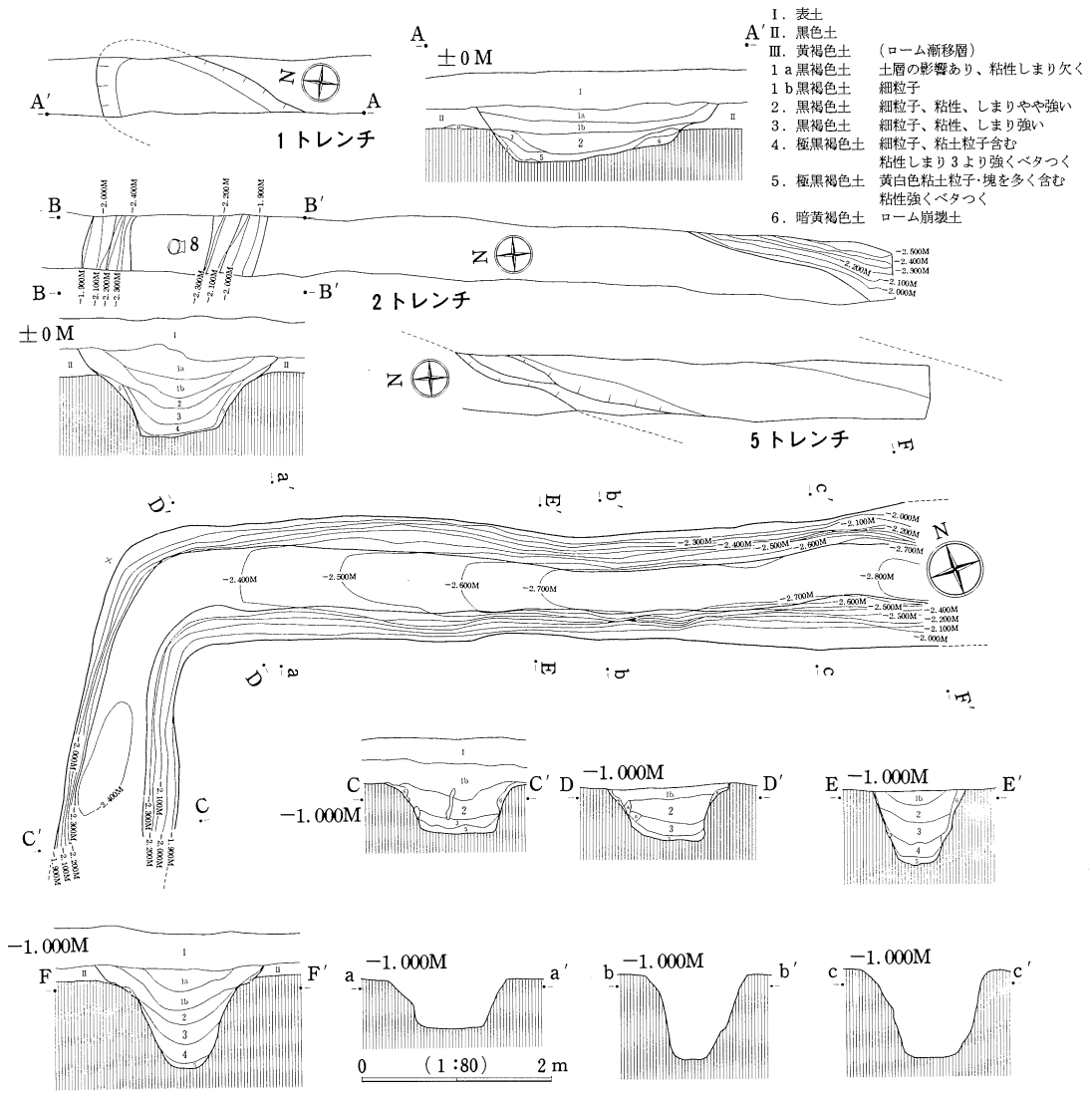
一辺の長さの推定が13mほどの規模を持つ方形周溝墓である。本調査範囲内で東側のコーナ



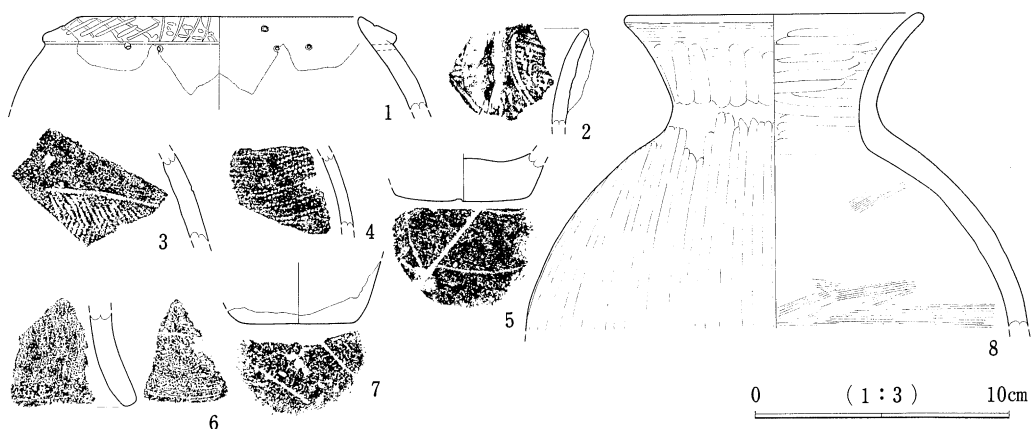
第14図 安久谷向ノ岱遺跡調査範囲と周辺地形図及び南総中学遺跡の弥生時代遺構配置



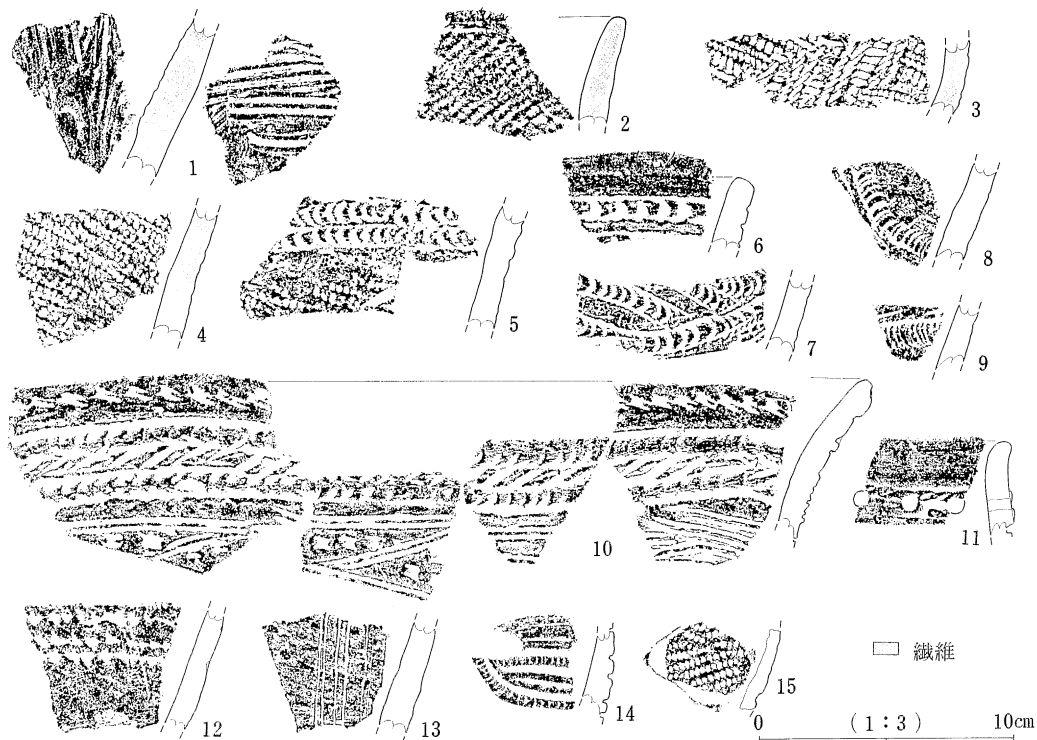
第15図 調査範囲と遺構配置図



第16図 1号遺構平面・断面図



第17図 1号遺構出土遺物実測図(その1)



第18図 1号遺構出土遺物実測図(その2)

一が途切れるものであることが判明している。溝の規模は幅1.3m、深さ0.4mである。

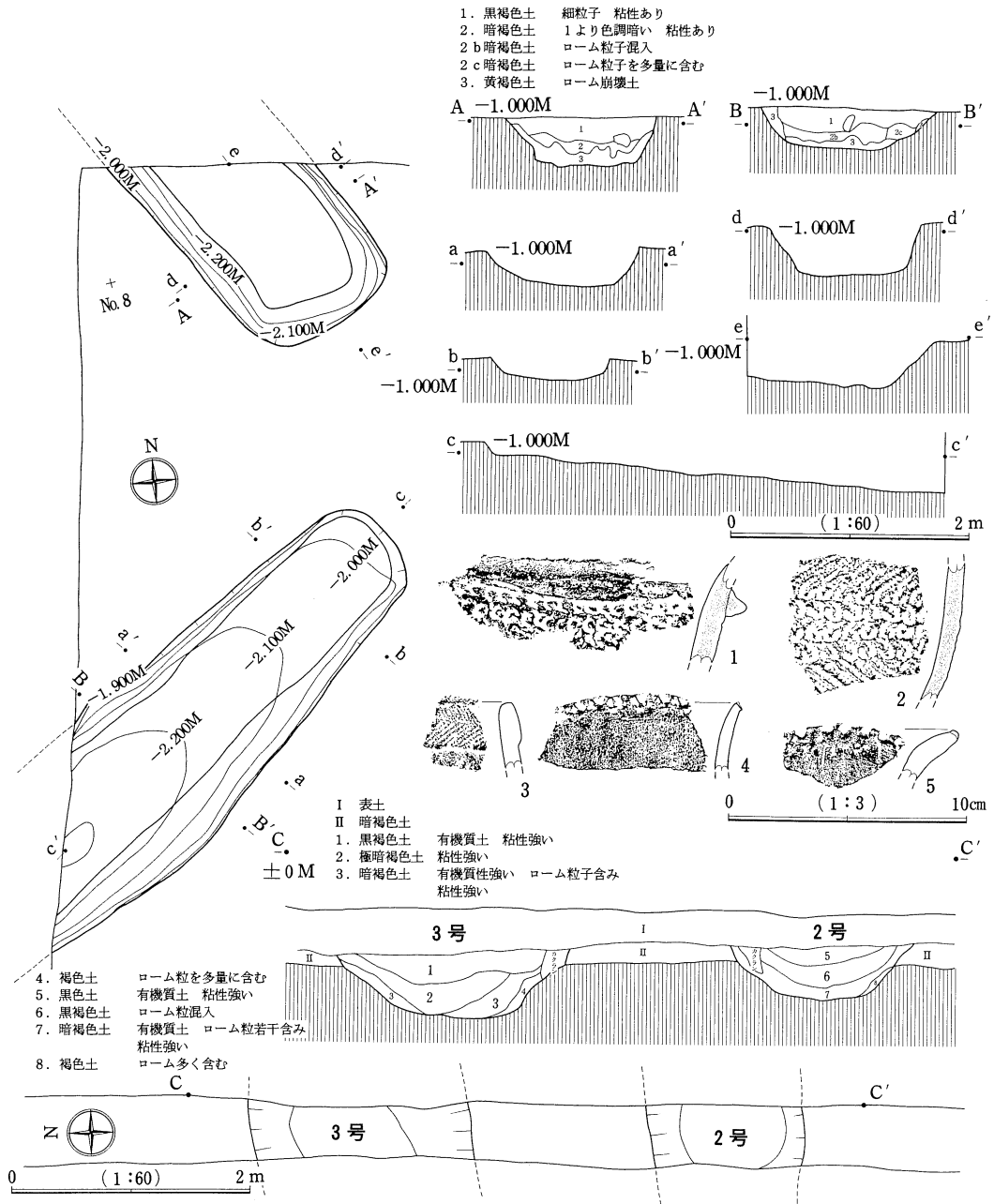
遺物は細片が多く、図示できるものはわずかである。1・2は縄文時代前期の土器で胎土に繊維を含み1には竹管による爪形文、2にはループ文がみられる。黒浜式、関山式と思われる。3～5は弥生土器で3は鉢の、4・5は甕の口縁部破片である。

#### 4号遺構(第20図)

2トレンチと本調査範囲の東辺に東側・西側コーナー部が検出された住居址である。規模は長軸推定4.5mである。本調査範囲の西側コーナー部を完掘した結果からすると、床面までの深さは25cm、さらに5cmほどの壁溝を有する。覆土には多量に焼土や炭化物を含んでおり、壁際床面直上には炭化材が横たわるようにして検出されており、火災に遭ったものと考えられる。遺物はわずかであるが、数片の土器と土製紡錘車が出土している。1の紡錘車は直径6.0cm、孔径11mm、2は縄文前期の土器で胎土に繊維を含み、3は弥生時代の壺形土器の頸部破片と思われる。

#### 5号遺構(第21・22図)

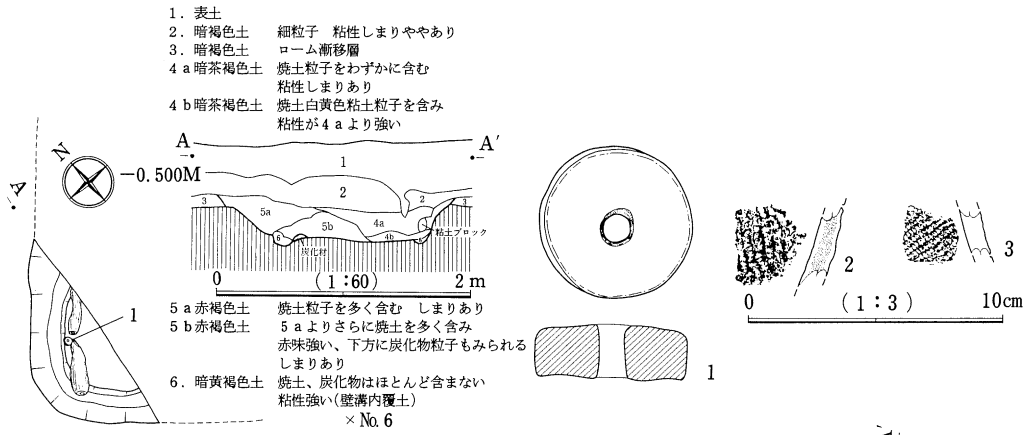
本調査範囲のほぼ中央で発見された住居址である。遺構確認面で既に床面が露呈する状況であり、壁面の立ち上がりは全くつかめなかった。また炉址も検出できなかった。床面残存範囲



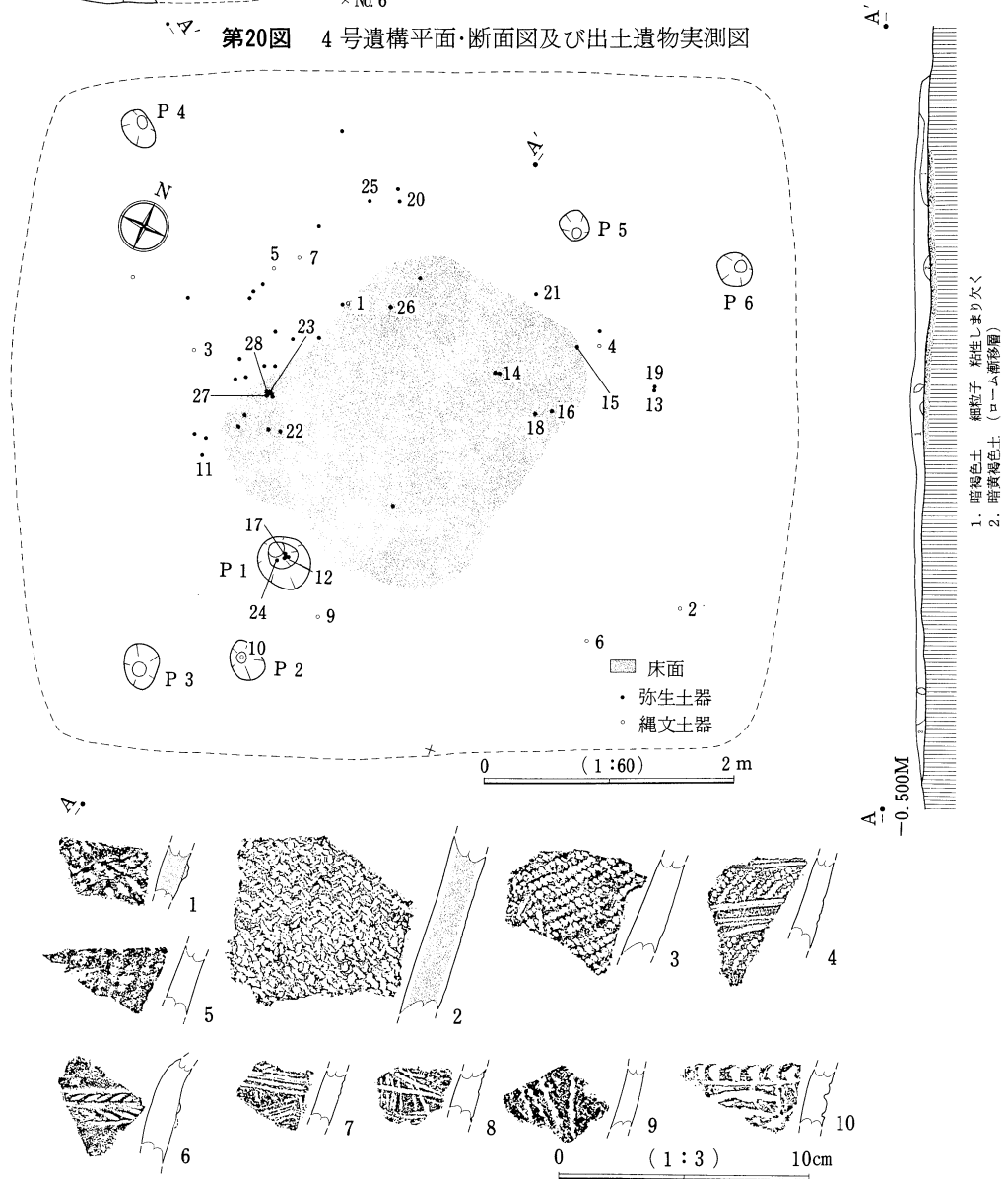
第19図 2・3号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図

は長軸2.6m・短軸2.0mである。柱穴状のピットはこの周囲に6本発見されたが、このうちP1を除く5本は深さ40~46cmとほぼ同規模である。P1は深さ65cmと他よりも深く、内部から比較的纏まった土器片を出土した点でもやや性格を異にしている。柱穴の位置・床面の残存範囲・遺物の分布範囲などからおよその住居規模を推定してみると、長軸で7m弱のものであったのではないだろうか。出土遺物より弥生時代中期宮ノ台期の所産とみている。

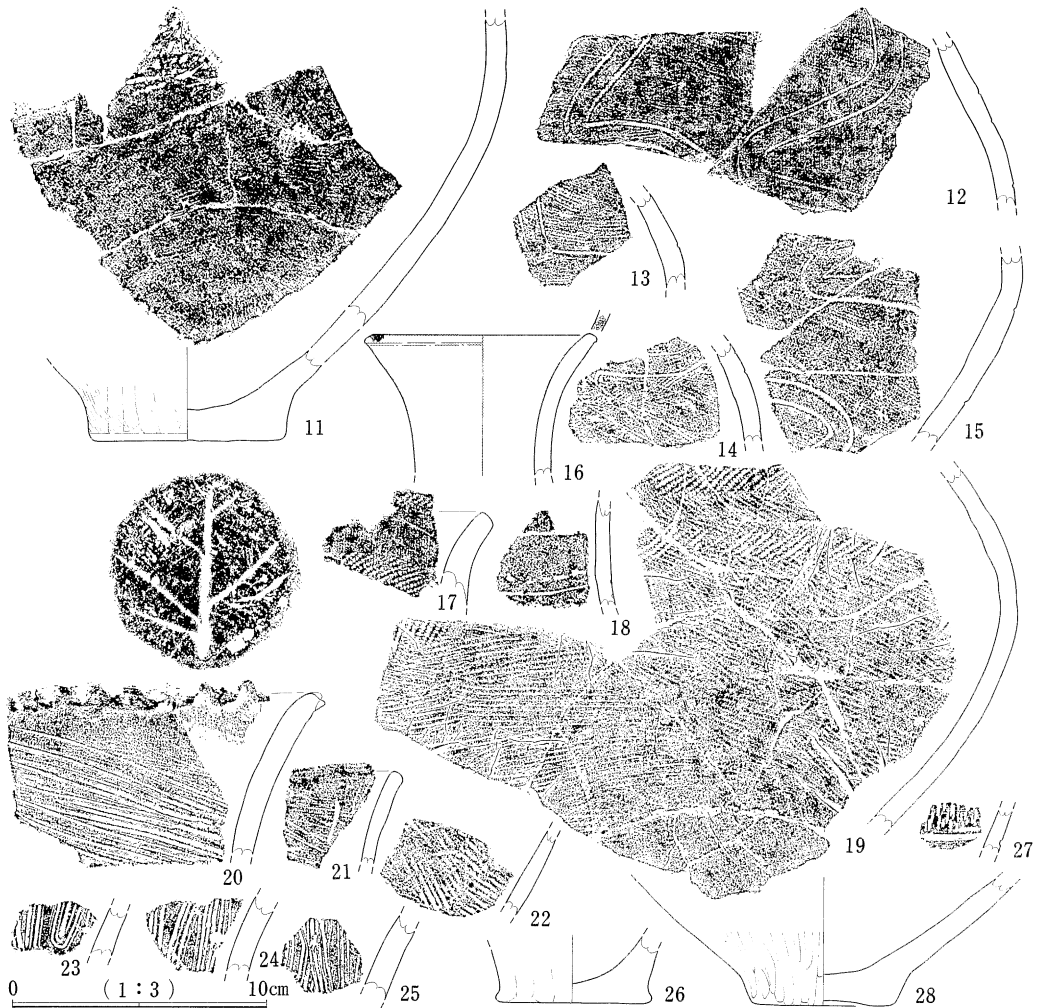
第21図1~10に縄文土器を纏めた。1は早期条痕文系土器で胎土に繊維を含む、2・4は前



第20図 4号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図



第21図 5号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図

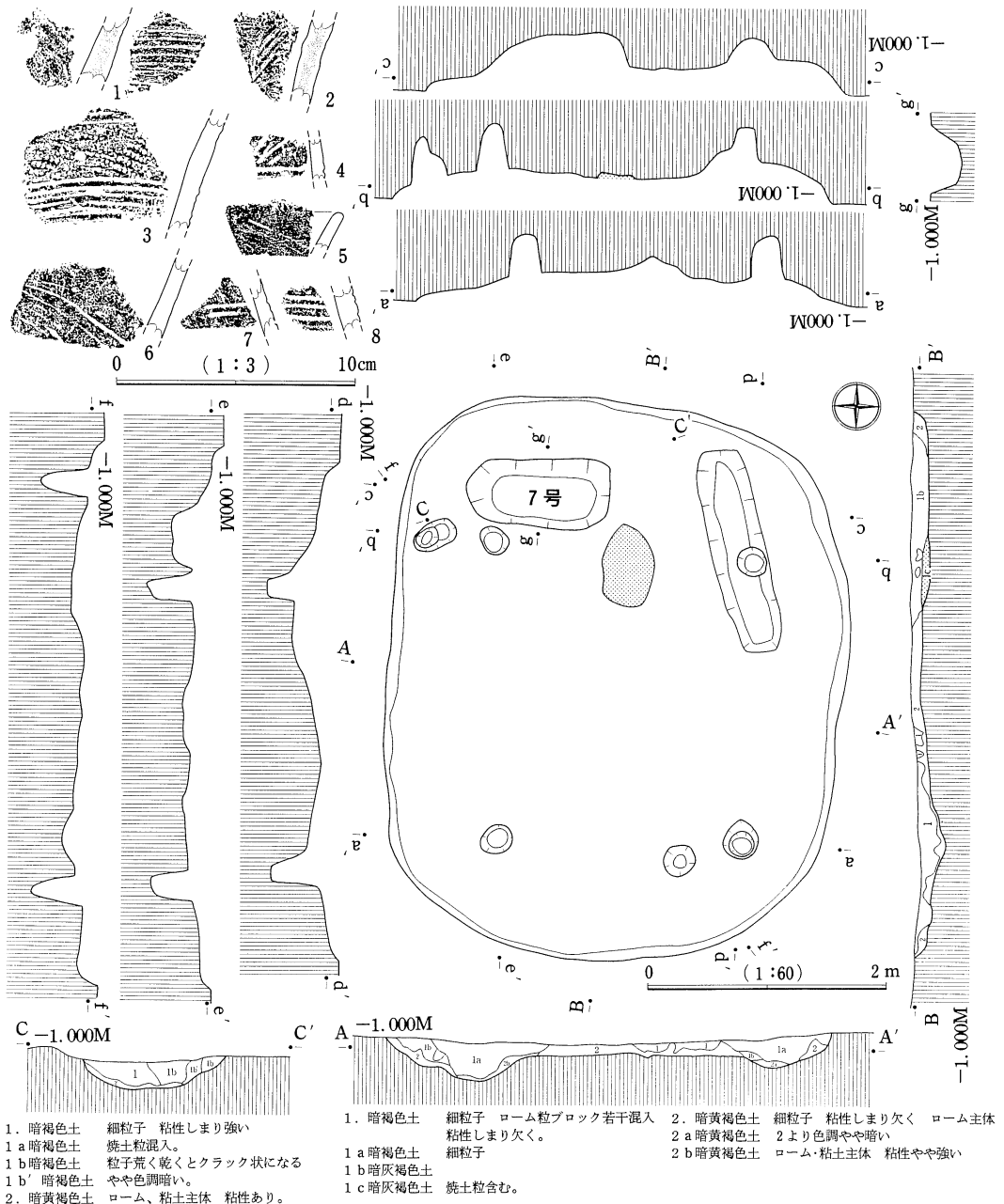


第22図 5号遺構出土遺物実測図(その2)

期関山式で2は組紐瓦痕文がみられ胎土に繊維を含み、4は竹管による横位の浅い沈線をもち地文は単節LRの縄文である。胎土に繊維は含まない。3は単節RL縄文、5は無節縄文を施すが胎土に繊維は含まない。6～8・10は諸磯式で6には浮線文、7には肋骨文10には竹管による深い爪形文がみられる。9は貝殻腹縁文が施され浮島式とみられる。

第22図には弥生土器を纏めた。11～19までが壺形土器、それ以外は甕である。11は胴下半部から底部までの資料で、底径は7.8cmを測る。外面には全面ハケ目が認められ、底部には木葉痕が認められる。内面は剥離が激しい。12～15は胴部破片でハケ目の上に縦位に蛇行しながら並走する2本の沈線文を施す。16・17は口縁部破片で、16は推定口径9.2cm内外面は赤彩され、口唇部に縄文がめぐる。17にも口唇部と頸部に縄文がめぐる。18は頸部破片で横位に沈線文・刺突文がみられ外面は赤彩される。19は胴部破片でハケ目の上に胴上半部では2列の縄文帯が





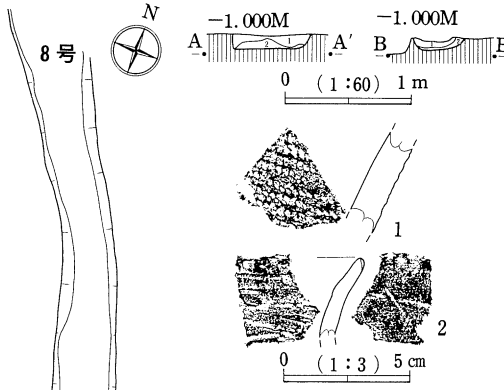
第23図 6号・7号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図

めぐる。内面は剥離がはげしい。20~25も外面にハケ目をもつ。20は口縁部破片で口唇部は上下から押捺される。

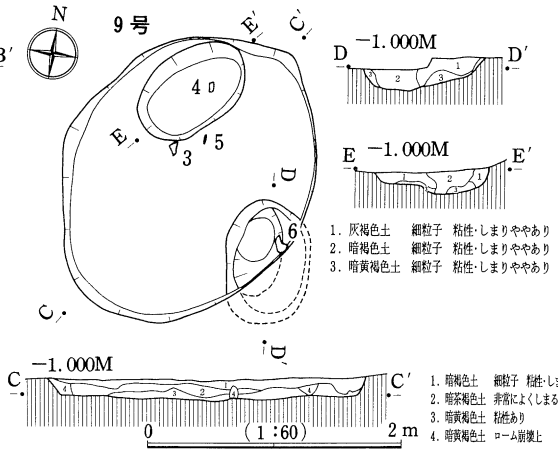
### 6号遺構(第23図)

長軸4.7m・短軸3.8mの隅丸方形の住居址である。、長軸を南北方向に向け、5号遺構の東側に隣接して発見された。検出時点で既に床面は失われており、掘かたのみが残存している状況

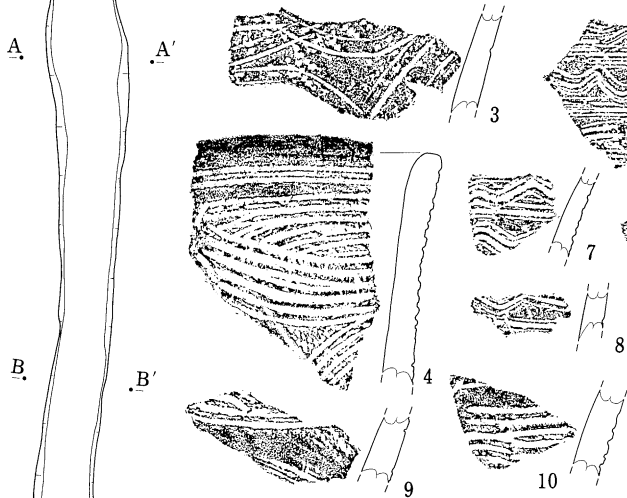
1. 暗褐色土 細粒子 粘性・しまり欠く
2. 暗黄褐色土 細粒子 粘性・しまり欠く



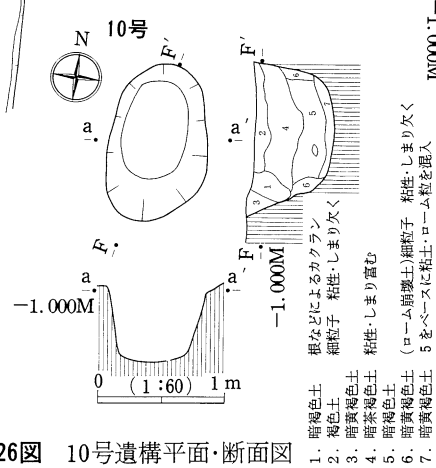
第24図 8号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図



1. 灰褐色土 細粒子 粘性・しまりややあり
2. 暗褐色土 細粒子 粘性・しまりややあり
3. 暗黄褐色土 細粒子 粘性・しまりややあり

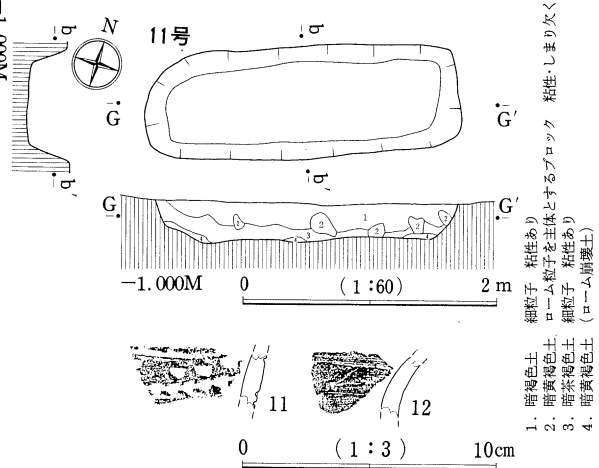


第25図 9号遺構平面・断面図及び出土遺物実測図



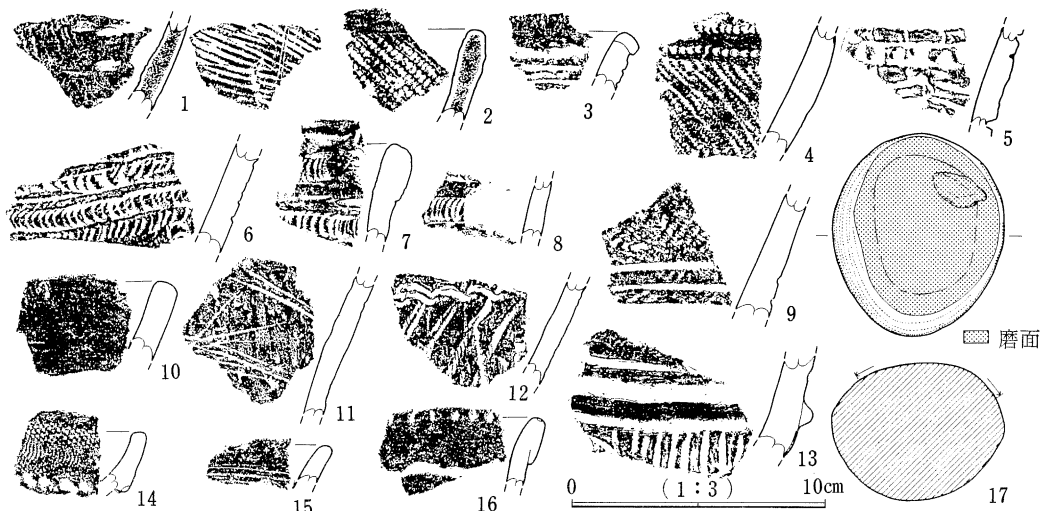
第26図 10号遺構平面・断面図

1. 暗褐色土
  2. 褐色土
  3. 暗黄褐色土
  4. 暗茶褐色土
  5. 暗褐色土
  6. 暗黄褐色土
  7. 暗黄褐色土
- 根などによるカクラン土  
細粒子 粘性・しまり欠く  
粘性・しまり僅む  
(ローム陶礫土)細粒子 粘性・しまり欠く  
5をベースに粘土・ローム粒を混入



第27図 11号遺構平面・断面図及び出土遺構実測図

1. 暗褐色土 細粒子 粘性あり
2. 暗黄褐色土 細粒子を主体とするブロック 粘性・しまり欠く
3. 暗茶褐色土 細粒子 粘性あり
4. 暗黄褐色土 (ローム崩壊土)



第28図 トレンチ及び遺構外出土遺物実測図

であった。炉址は北よりの部分に痕跡程度に認められた。柱穴は6カ所あり、深さは40cm内外である。位置的にみて南西コーナーの内側と、北西コーナーの外側の2本の柱穴は立て替えによるものと思われる。

遺物は数点の土器の破片と炭化材の小片が2点出土したにすぎない。1～3は縄文土器で、1・2は早期条痕文系土器で胎土に繊維を含む。3は前期関山式で竹管による横位の浅い沈線をもち地文は単節縄文である。4～8は弥生土器で、小破片のため詳細は不明である。

#### 7号遺構(第23図)

6号遺構の下、北西隅に検出された土壌である。規模は長軸1.2m・短軸0.6m・深さ25cmであり、長軸を東西方向にむける。遺物は皆無であった。

#### 8号遺構(第24図)

調査区西よりの9・10号遺構の間を南東―北西方向にはしる溝状の遺構である。溝の深さは10cm内外と極めて浅く、南側は途中で検出不可能となった。出土遺物は縄文・弥生土器の小片が数点あるのみで、時期を断定する材料とはならない。

#### 9号遺構(第25図)

8号遺構の西側に隣接して発見された楕円形の土壌である。規模は長軸2.5m・短軸2.0m・深さ15cm程である。中層に比較的良好な層があるが床状ではない。遺構の性格は不明。

遺物は縄文前期諸磯a式土器の比較的大型の破片が数点出土している。3～10は肋骨文あるいは竹管による沈線文を主たる文様モチーフとする。遺構は当該期の所産とみてよからう。

#### 10号遺構(第26図)

調査区の北辺8号遺構の東約1mの地点より検出された長楕円形の土壌で、長軸1.3m・短軸

0.8m・深さ55cm程の規模をもつ。遺物は全く出土していないので時期は不明。

#### 11号遺構(第27図)

5号遺構の北に隣接して発見された、長軸2.5m・短軸0.9m・深さ30cm程の長方形の土壇であり、覆土はかなり黒味の強い土であった。遺物は小片の土器がわずかに出土したのみで時期は断定できない。規模と形態から墓壇ともみなせる。

#### その他の遺物(第28図)

その他の遺物として、確認調査でトレンチで一括に取り上げられたものと本調査範囲で遺構に伴わずに出土したものを纏めた。1～13までは縄文土器で早期から中期までのものがある。14～16までは弥生時代の壺形土器の口縁部破片である。17は磨石で片側が特に入念に研磨されその面が焼けて赤化している。帰属時期は不明。

#### 小 結

今回の確認・一部本調査の結果、昭和47年度の南総中学遺跡の調査で明らかになった北東側台地部に展開する弥生時代の墓域がさらに西側にも展開し、また居住域の一部も存在することを確認することができ、当台地上における弥生時代の環壕集落内での居住域と墓域の占地の変遷をとらえるうえで貴重な資料を加えたことになる。また縄文時代の遺構としては土壇1基が確認されただけであったが、遺物的には遺構外や他の時期の遺構内から比較的多くの資料が得られており、前期を主体とする集落が同一台地上に展開しその一部がその後の時代の遺構によって壊されている可能性が指摘できる。

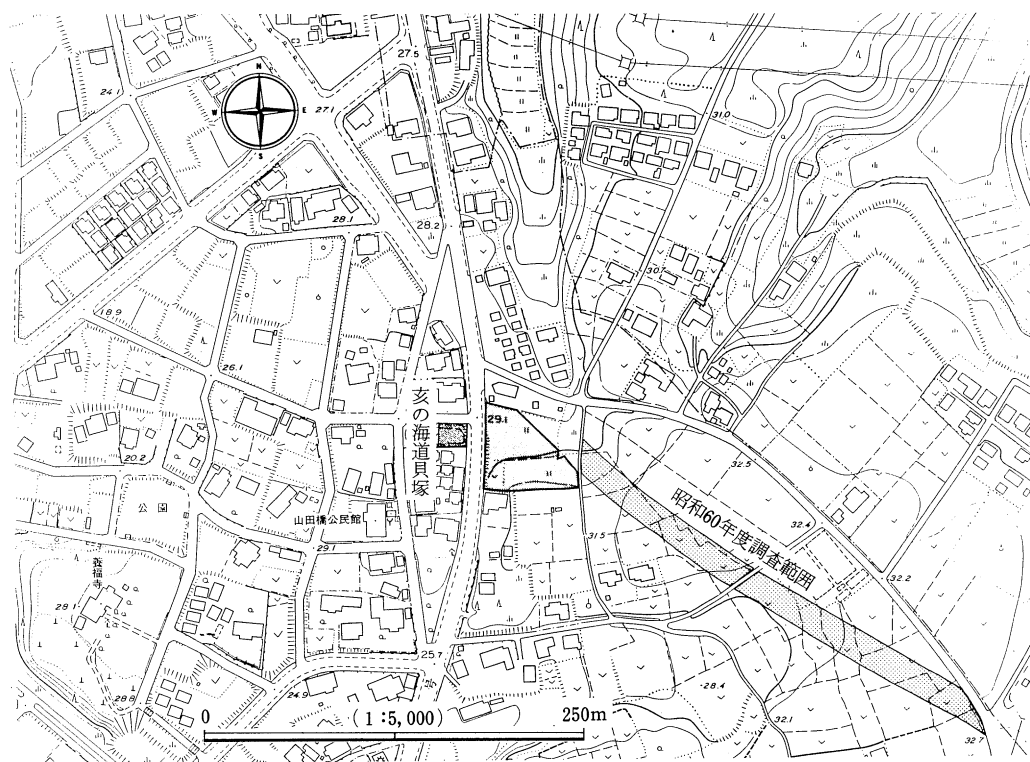
## 第6章 山田橋表通遺跡

### 調査方法(第30図)

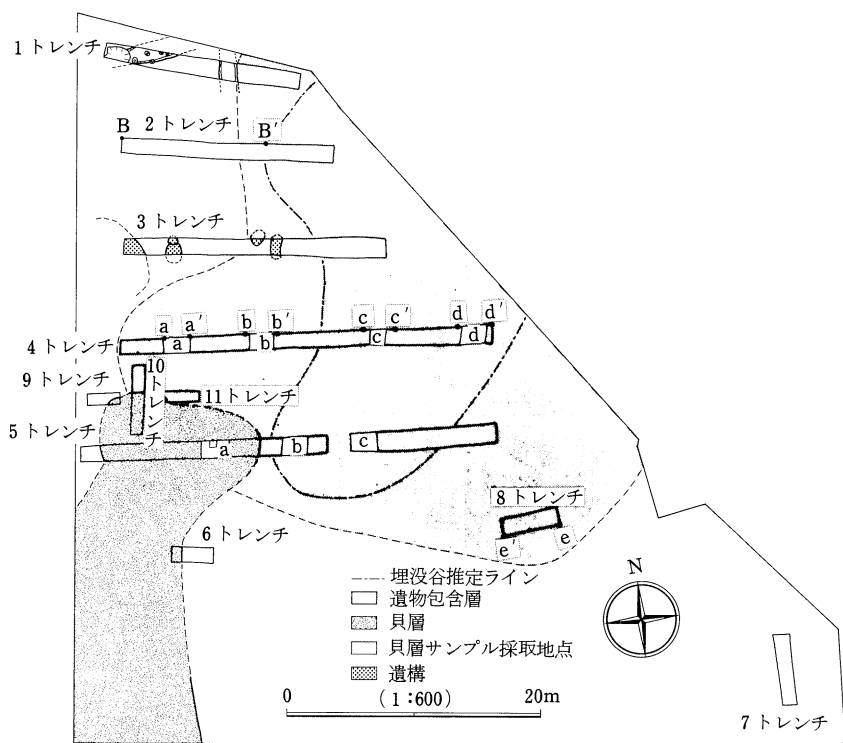
調査区の北側におおむね東西方向に5本、貝塚の範囲確認のために3本、南側は盛り土と撤去された家屋の基礎が調査時点で残存していたためにそれらの無い場所を選定して3本、計11本の任意トレンチを設定した。調査が進行していく過程で、調査区の北東辺から中央部に向かってかなり深い埋没谷が入り込み、これにむかって西から東へかなり広い範囲で、縄文時代の遺物を多量に包含する層が存在することが判明した。したがってこれらの最も顕著な調査区中央部では包含層の上面で止め、トレンチ内に任意に選んだ7カ所のみ2m幅で包含層の厚さと遺物の包含量を確認するために掘り下げた。また貝塚についてもサンプル用に採取した地点以外は確認面で止め、それ以上掘り下げていない。

### 遺構と遺物

1トレンチ(第31図) トレンチの東側約7mのところから遺物包含層が存在する。包含層までは60cm、包含層の厚さは30cmである。埋没谷はこのトレンチにはかかっていない。西側は遺構が存在するため表土以下の層序が他の場所とは異なる。遺構は東西方向に走る幅1.3m・深さ



第29図 山田橋表通遺跡調査範囲と周辺地形図



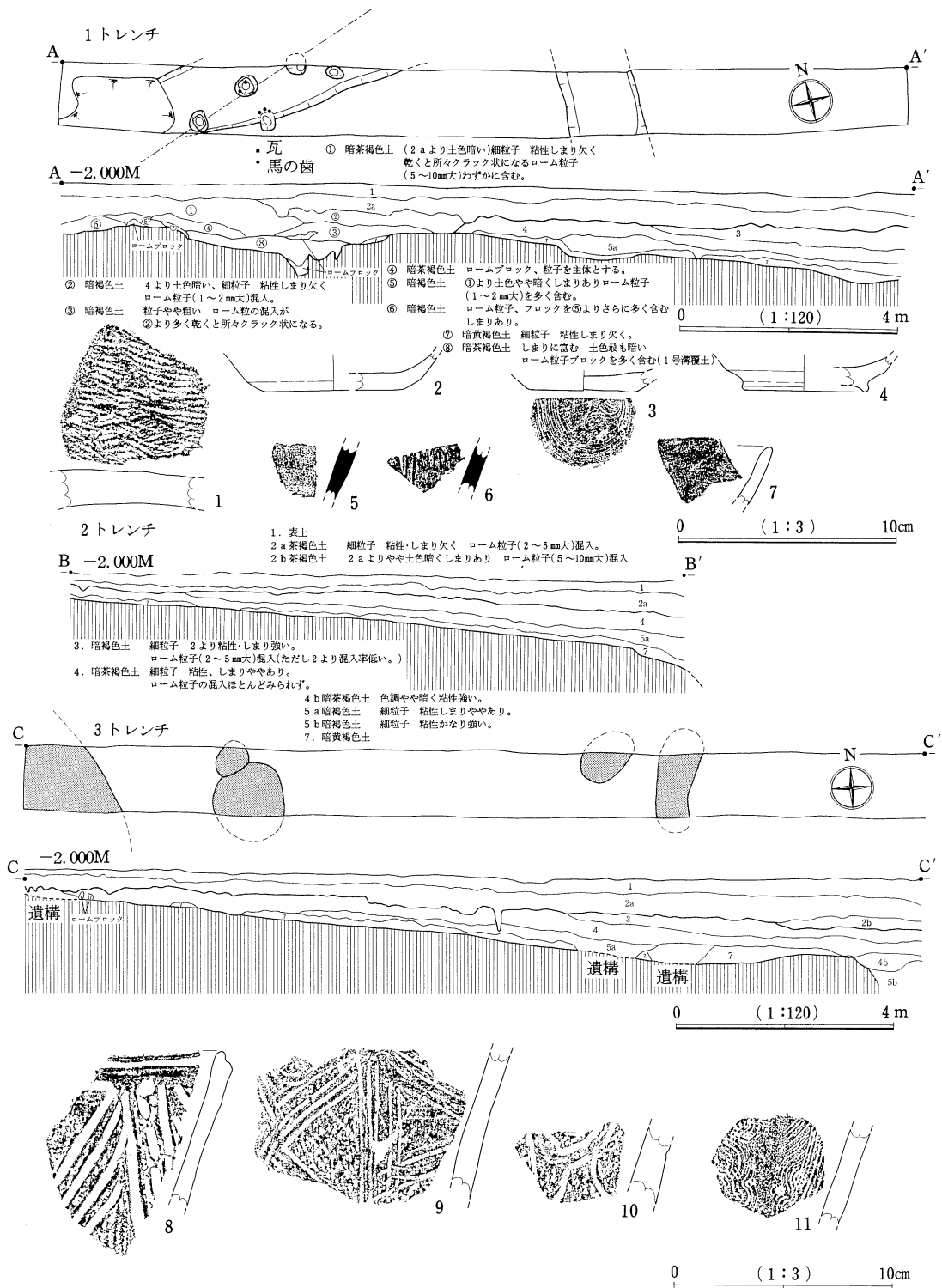
第30図 調査範囲と遺構配置図

15cm程の浅い溝で覆土中からは瓦破片、高台付杯、糸きり底の杯、さらに馬の歯5点が出土した。さらに溝の底面より5本のピットが検出され、このうちの3本は隅丸方形で深さ50cm・約1mの間隔で並び、掘立柱建物の柱穴と考えられる。またこの溝の東に南北方向にはしる溝状の落ち込みが認められたが、覆土が前述の溝とは異なり別物と考えている。

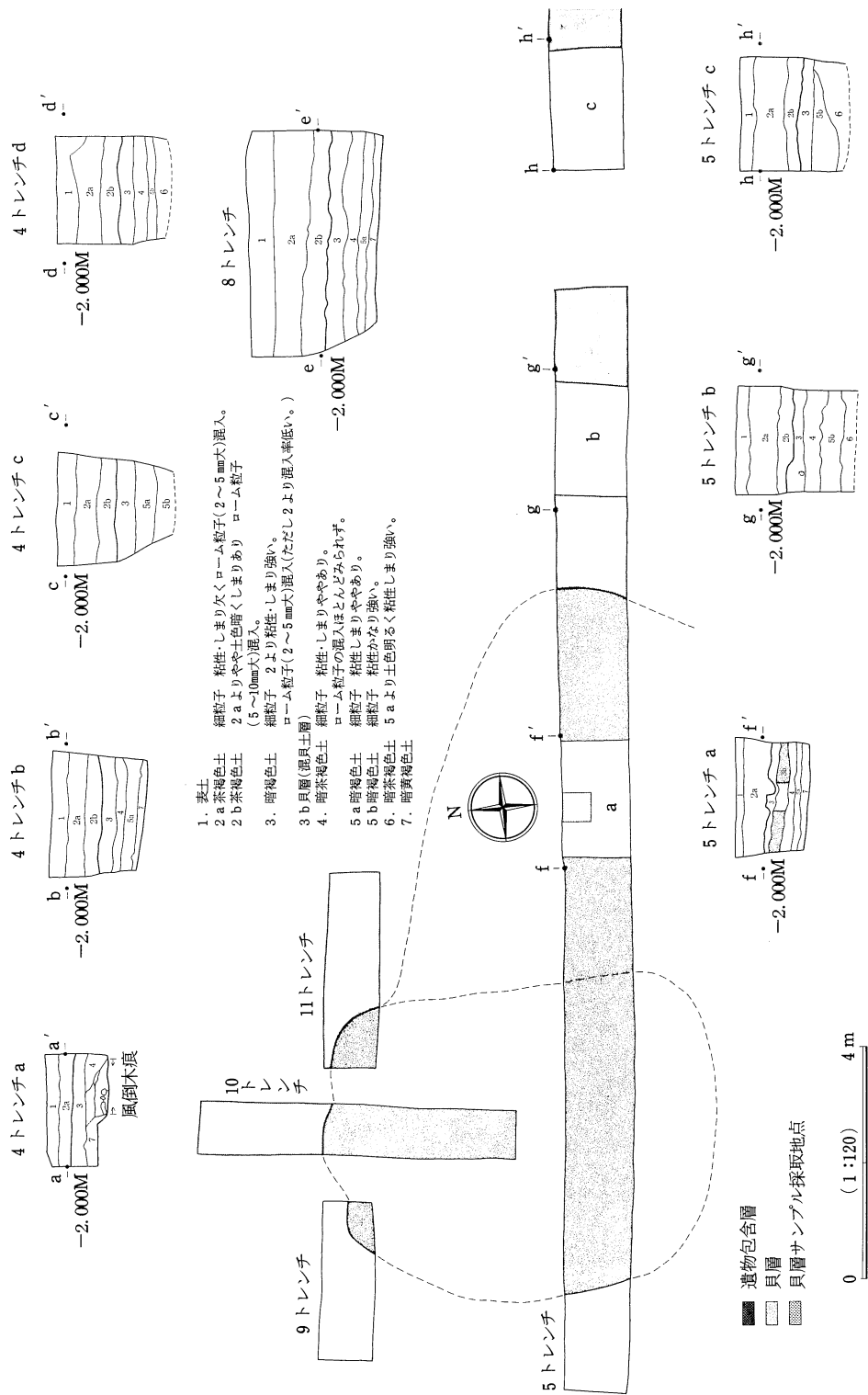
**2トレンチ** トレンチの東側約5mのところから埋没谷がはじまる。ローム層までは、西側で0.5m、東側で1.6mで谷直前までは緩斜面をなす。このトレンチでは遺物包含層は顕著でない。

**3トレンチ(第31図)** トレンチの東側約6mのところから埋没谷がはじまり、包含層はこの内側5mのところより顕著になる。厚さは20cm~40cmである。このトレンチも2トレンチ同様谷直前までは緩斜面をなすが、ここではローム層直上で4基の遺構を確認した。このうち最も西よりのものは確認面で焼土や比較的大きな破片の土器が検出されており、住居址の可能性が高い。遺物は縄文時代後期前葉堀之内I式であり、当該期の遺構である可能性が高い。他はその大きさ・形状より土壌と判断した。

**4トレンチ(第32図)** このトレンチでは西側では地表下40cm、東側では地表下90cmより全面に遺物包含層が確認された。ここでは2m幅のテストピットを4カ所設け、遺物包含層の厚さと遺物包含量を確認した。西側の2地点ではローム層が確認されたが、東側の2地点では5層以



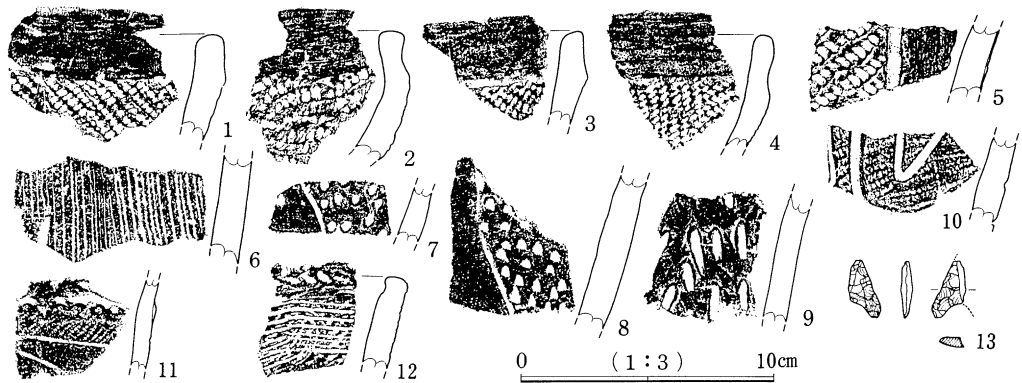
第31図 1・2・3 トレンチ断面図・遺構平面図及び出土遺物実測図



1. 表土
  - 2 a 茶褐色土
  - 2 b 茶褐色土
  3. 暗褐色土
  - 3 b 貝層(混貝土層)
  4. 暗茶褐色土
  - 5 a 暗褐色土
  - 5 b 暗褐色土
  6. 暗茶褐色土
  7. 暗青褐色土
- 細粒子 粘性しまり欠くローム粒子(2~5mm大)混入。  
2 a よりやや土色暗くしまりあり ローム粒子 (5~10mm大)混入。  
細粒子 2 より粘性しまり強い。  
ローム粒子(2~5mm大)混入(ただし2 より混入率低い。)
- 細粒子 粘性しまりやあり。  
ローム粒子の混入ほとんどみられず。  
細粒子 粘性しまりやあり。  
細粒子 粘性かなり強い。  
5 a より土色明るく粘性しまり強い。

第32図 4・5 トレンチテラスピット・8 トレンチ断面図及び5・9・10・11 トレンチ平面図





第33図 2b層下部～3層上面出土遺物実測図

トレンチ・地点	層	層の厚さ(m)	土量(m <sup>3</sup> )	点数	重量(g)
4トレ a	3	0.20	0.48	76	1450
4トレ b	3	0.25	0.60	253	3000
4トレ c	3・5 a・5 b	1.00	1.68	266	2070
4トレ d	3・4・5 b	0.60	1.33	205	1700
5トレ a	3 b(貝層中)	0.40	0.91	336	2960
5トレ a	4・5 a(貝層下)	0.20	0.45	218	3640
5トレ a	7(貝層下)	0.15	0.34	33	240
5トレ b	3	0.20	0.42	442	3700
5トレ b	4.5 b	0.70	1.47	285	3150
5トレ c	3	0.25	0.57	621	4335
5トレ c	5 b	0.20	0.41	571	3785
5トレ c	6	0.30	0.65	40	575

土量(m<sup>3</sup>)=トレンチの長さ(m)×幅(m)×層の厚さ(m)

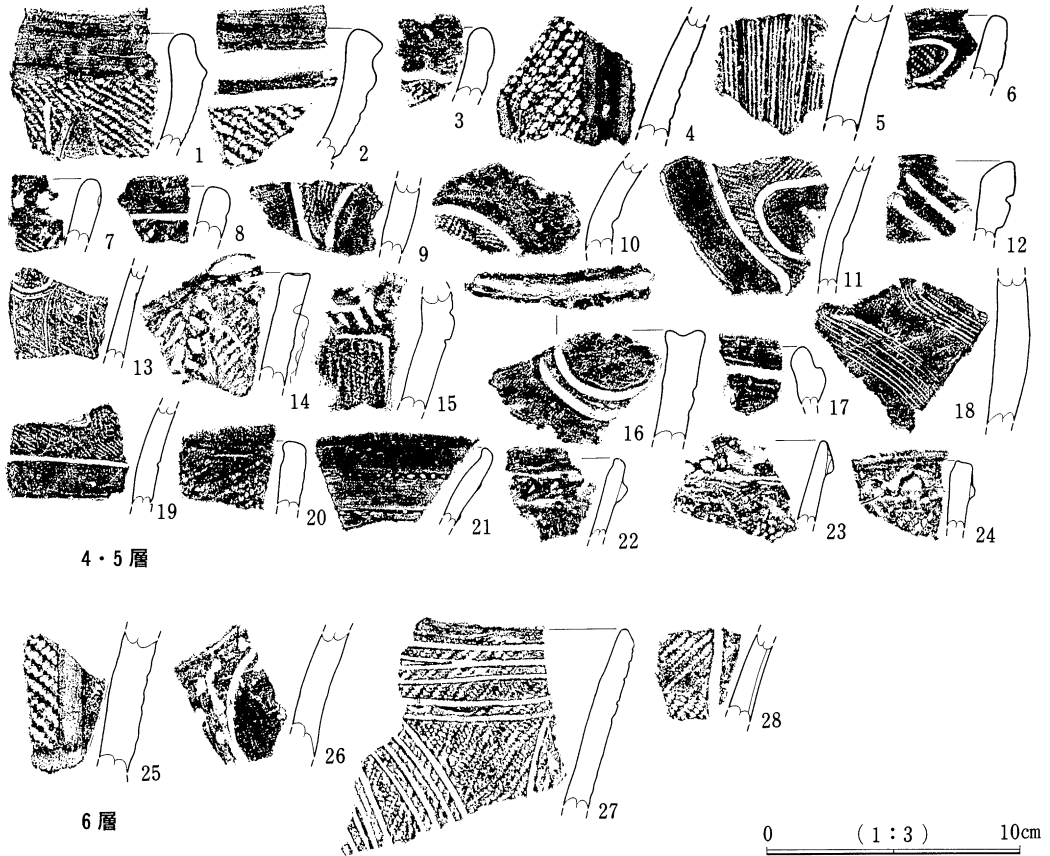
第1表 包含層の遺物包含量比較

下が水つきとなり(地表下約2m付近)それ以上掘り下げられない。このトレンチの中央から東側にかけて埋没谷の存在が示唆される。遺物は2b層下部から5b層まで認められるが3層中に最も含まれる(第1表)。層ごとに遺物を取りあげたが、縄文中期末から後期中葉頃までのものが混在して見られる傾向にある(第33～35図)。

**5トレンチ(第32図)** このトレンチでも西側では地表下60cm、東側では地表下90cmより全面に遺物包含層が確認された。ここでは2m幅のテストピットを3カ所設け、遺物包含層の厚さと遺物包含量を確認した。西側の1地点のみローム層が確認され、他の2カ所では6層以下が水つきとなり(地表下約2m付近)、テストピットa・bの間の地点から東側に埋没谷が存在すると推定される。遺物は2b層下部から6層まで認められやはり3層に最も多く含まれる。テストピットaでは3層下に貝塚の末端部にあたる混貝土層が検出された。厚さ25cm程である。各層からの遺物は、縄文中期末から後期中葉頃までのものが混在して見られる傾向に変わりないが(第33～35図)、テストピットaでは貝層(3b層)中には後期前葉堀之内I式が多く、貝層下(4・5a層)には中期末加曾利E式が多く見られる傾向にある(第36図)。



第34图 3層出土遺物実測図



第35図 4・5層, 6層出土遺物実測図

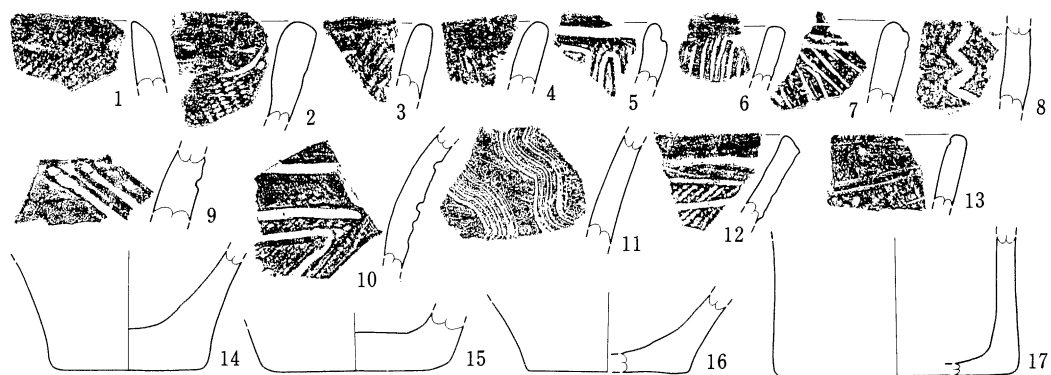
6 トレンチ トレンチの西側隅に若干の貝の散布が認められた。

7 トレンチ 地表下20cmほど掘り下げるとハードローム層になり、この周辺が削平されている状況が認められた。

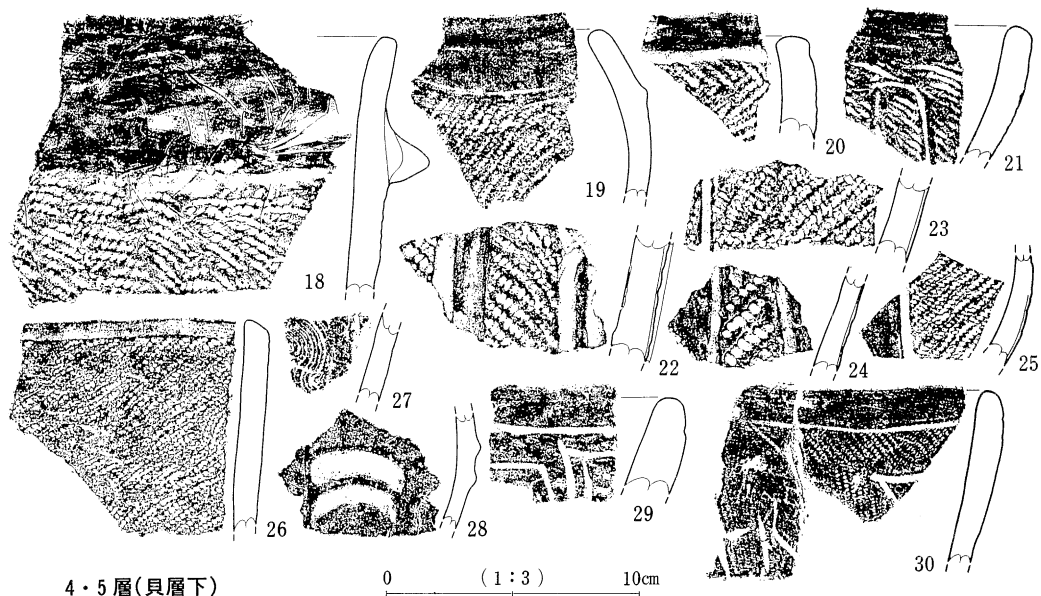
8 トレンチ(第32図) この周辺には50cm～1mの客土がある。客土下1.9mでローム層に達し、埋没谷がここまでは及んでいないことが判る。遺物包含層までは60cm、厚さは30cm程である。4層以下はあまり多く遺物を含まない。縄文中期末から後期中葉頃までのものが混在して見られる傾向に変わりない。

9・10・11 トレンチ(第32図) 貝塚の範囲を確認するために設定したトレンチである。地表下20cmほどで貝層の上面が現れ、貝塚の北辺部がとらえられた。5 トレンチでとらえた西辺部と合わせると、6m×7m程の楕円形内に貝層の最も良好な残存状況が認められ、あるいは堅穴住居址内に投棄されたものかもしれない。

小 結 調査区の北辺部に奈良・平安時代相当の遺構の存在が示唆されるものの、その主体は縄文時代中・後期である。調査区東辺部から中央部にかけて、南北方向に埋没谷が存在し、こ



3 b層(貝層中)



4・5層(貝層下)

第36図 3 b層(貝層中)、4・5 a層(貝層下)出土遺物実測図(5トレ a)

れにむかって西側から縄文時代中期末～後期中葉の遺物を多量に包含する層が入り込んでいる(主体は加曾利E～堀之内I)。遺物は確認できた最も下層まで包含されているが、約30cmの厚さの3層中にピークが認められる。各層間での遺物の時期差は、貝塚のある調査区の西辺部付近しか認められず、東側では異時期のものが混在する傾向にあり、斜面部での遺物の移動(流れ込み)が考えられる。当該期の遺構は包含層を掘り抜いている3トレンチで検出しているものを見るかぎり、若干の平場のある調査区の西辺から緩斜面部にかけて発見される可能性は高い。また今回の成果として、調査前に課題となっていた亥の海道具塚の国道東側の状況がある程度明らかになったことがあげられる。調査区南西部分の状況がつかめていないので、全体の規模については明らかでないが、後期前葉堀之内I式期の厚さ30cm程度の混土貝層と推定される。

## 第7章 山木白船城跡遺跡

### 調査方法(第38図)

今回の調査区は北西から南東方向にはしる斜面によって東・西2カ所に平坦面が分れている。トレンチは東側の平坦面(下位平坦部)に1カ所、斜面部に1カ所、西側の平坦面(上位平坦部)に7カ所の計9カ所に任意に設定し、トレンチ内に遺構が確認された場合はそれらを部分的に完掘し、遺構の時期と性格の把握に努めた。

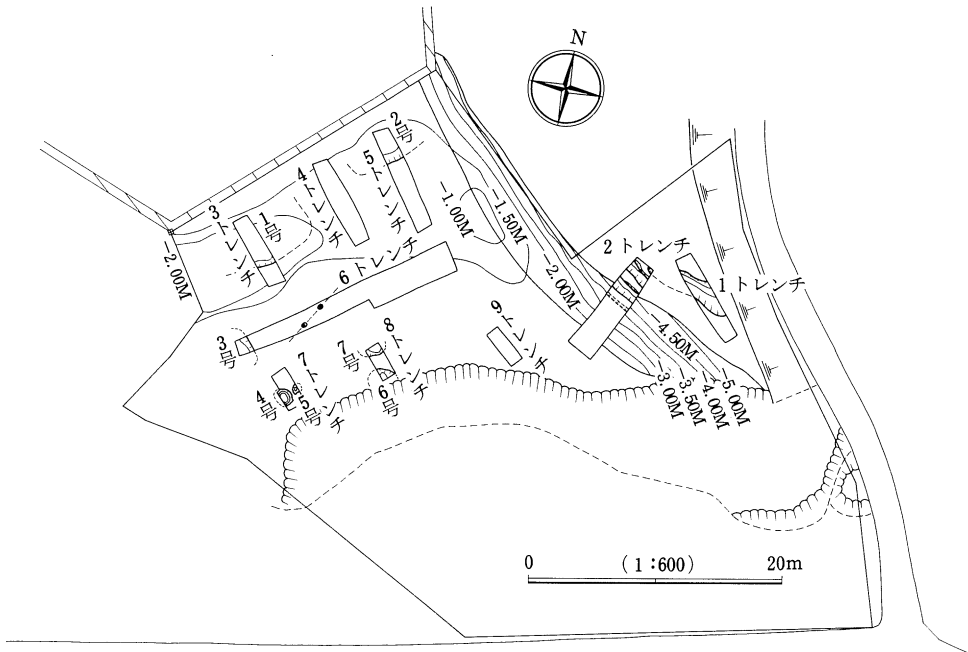
### 遺構と遺物

#### 1・2トレンチ(第39・40図)

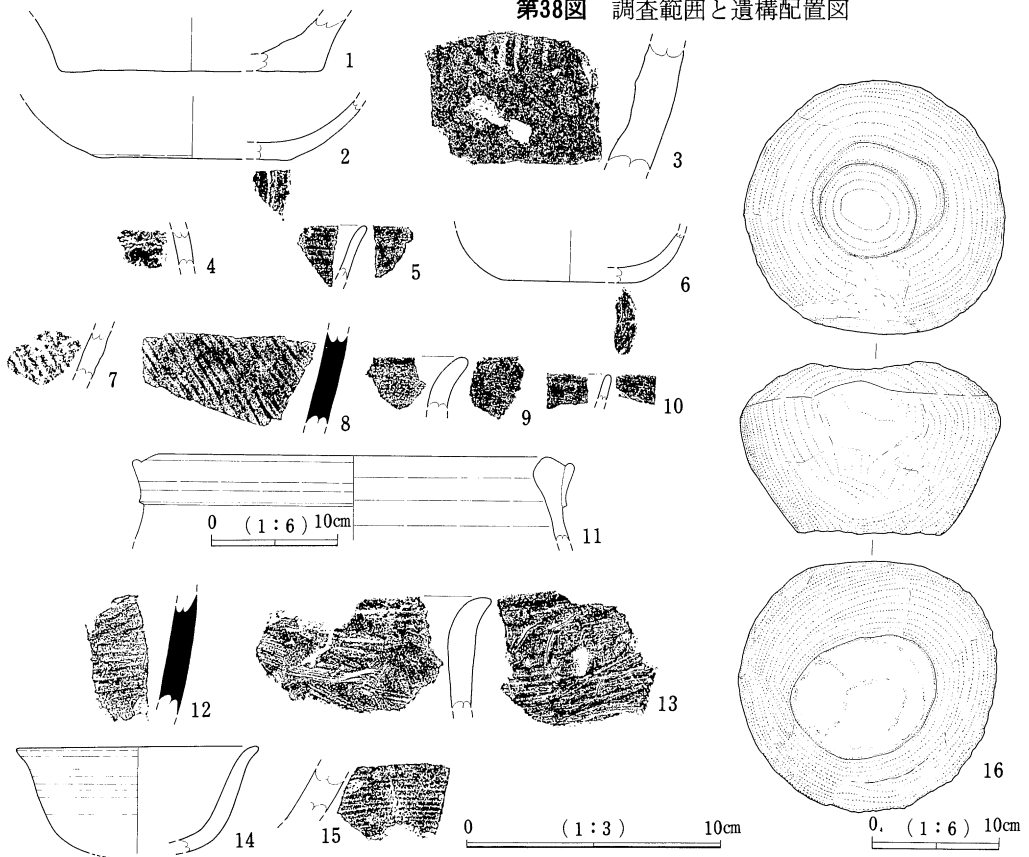
斜面部を階段状に造成した遺構が検出された。段はトレンチの範囲で6段ある。そして1トレンチの北東隅は平場となり非常に硬く踏み締められた状況が確認された。また一番下の段とこの平場との間には、幅40cm・深さ20cm程の浅い溝がはしる。排水のための溝であろうか。1トレンチの断面観察によると、中層以下に青白色粘土やローム、砂質土が交互に水平堆積する状況がみられ、明らかに人為的に段階的な埋め戻しをおこなった形跡がうかがえる。この斜面部から西側の平坦面に移行する接点付近は、若干土が盛り上がっている状況が見られ、土塁の



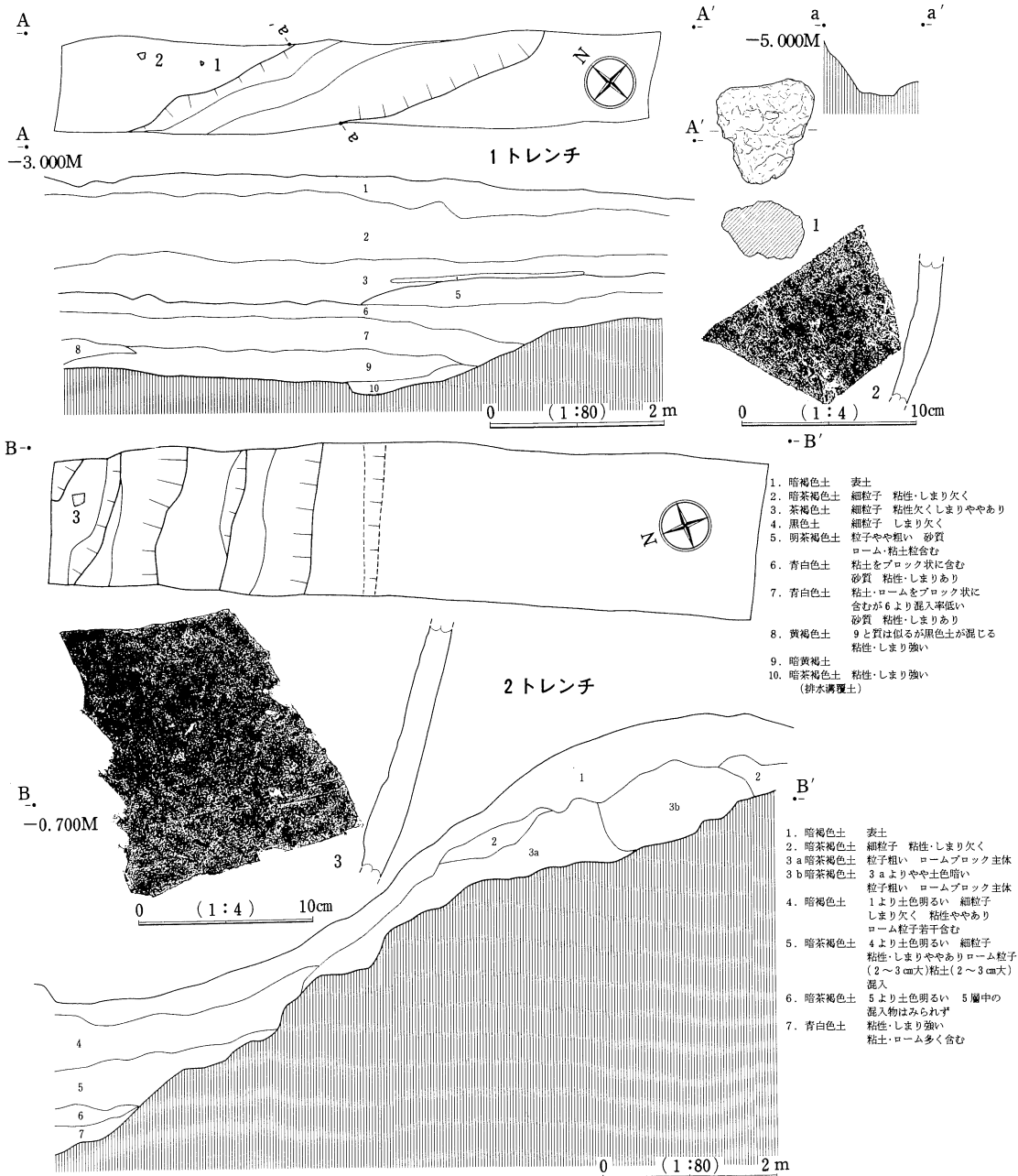
第37図 山木白船城跡遺跡調査範囲と周辺地形図



第38図 調査範囲と遺構配置図

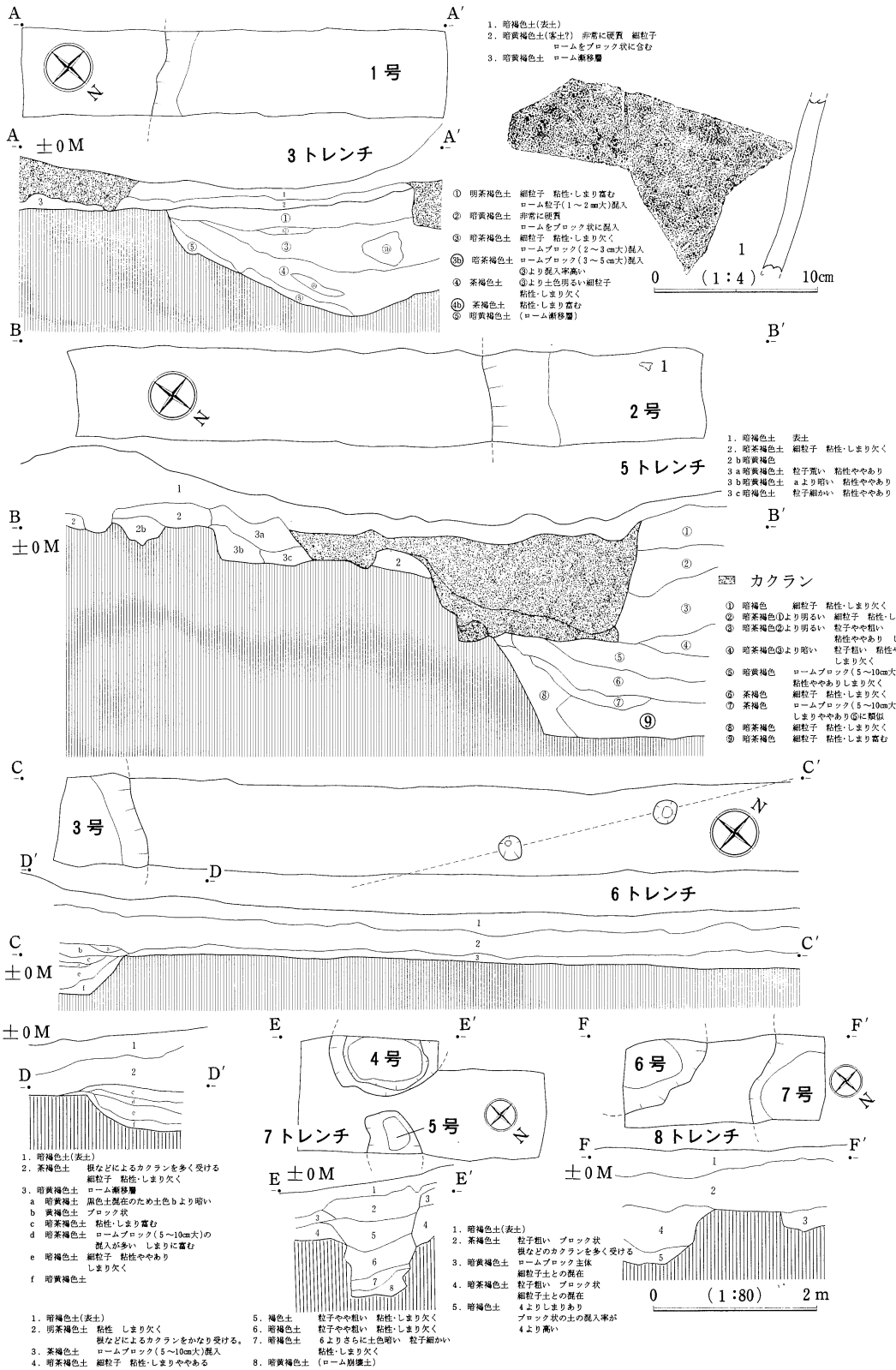


第39図 トレンチ及び遺構出土遺物実測図  
 1～3(1トレ), 4～6(2トレ), 7～10(3トレ1号遺構), 11(5トレ2号遺構),  
 12～13(6トレ3号遺構), 14～16(6トレ)



第40図 1・2 トレンチ遺構平面・断面図及び出土遺物実測図

痕跡と推定した。2 トレンチの断面観察でも土壘状の盛土が斜面部方向に流れている状況が見受けられる。1 トレンチからは大甕の破片と鉄滓数点、甕や杯の底部が出土している(第40図-1・2、第39図1~3)。2 トレンチからも同様の大甕の破片1点(第40図-3)や弥生時代



第41図 3・5・6・7・8 トレンチ遺構平面・断面図及び出土遺物実測図



の壺形土器の頸部破片(第39図-4)、杯の破片(第39図-5・6)などが出土している。

### 3・4・5 トレンチ(第41図)

調査区の西辺部は現況でやや周囲よりも凹んでいる状況がみられた。この凹みを横断する方向に3本のトレンチを入れたところ、3トレンチでは深さ1.3m、5トレンチでは深さ2.0mの堀状の遺構が検出された。ただし両者は形態面で、3トレンチのものが底面が挿鉢状になるのに対し、5トレンチのものは底面が平らでかなり鋭角に立ち上がるというように相違する。また4トレンチではこれら堀状の遺構は認められず、50cm程の傾斜で北西側に下っていく状況であった。つまり堀状の遺構は連結せず、斜面部とその反対の方向から入り込み、4トレンチの付近が土橋状に残されているものと思われる。3トレンチでは図示可能な土器片が数点あるが(第39図7~10)、7は縄文土器、8は須恵器、9は甕の口縁部、10は杯の口縁部破片であり、時期を断定できる資料とは言えない。5トレンチ内遺構底面付近より1・2トレンチのものと同様の大甕の破片が出土している(第41図-1)。うち1点は口縁部の破片で復元径30.6cmを測る(第39図-11)。

### 6 トレンチ(第41図)

南西隅に深さ60cm程の土壌が検出された。出土遺物としては須恵器の破片(第39図-12)と甕の口縁部破片(第39図-13)がある。また、径30cm・深さ70cm程のピットが2mの間隔で並んで南東-北西方向に向かって検出された。掘立柱建物の柱穴であろうか。この他、遺構外から五輪塔の水輪の部分(第39図-16)(最大径が20.6cmを測り、特に梵字は刻まれていない)や陶器の碗(第39図-14)、挿鉢の破片(第39図-15)などが出土した。

### 7 トレンチ

推定で長軸1.5m・短軸1.0m・深さ1.2mの土壌と、長軸0.7m・短軸0.6m・深さ1.0mの土壌が検出された。遺物は全く出土しなかった。

### 8 トレンチ

推定で長軸1.8m・短軸1.2m・深さ0.6mの土壌と、推定で長軸1.9m・短軸1.4m・深さ0.4mの土壌が検出された。遺物は全く出土しなかった。

### 9 トレンチ

遺構遺物ともに検出されていない。

小 結 確認調査の結果とくに留意すべき点は、斜面部から下位平坦部における階段状造成面とそれに続く北東隅の硬化した平坦面、上位平坦部の西辺部における斜面部側とその反対の方向からの堀状の遺構である。これらが城郭の構造状いかなる意味をもつものか、今後の課題である。



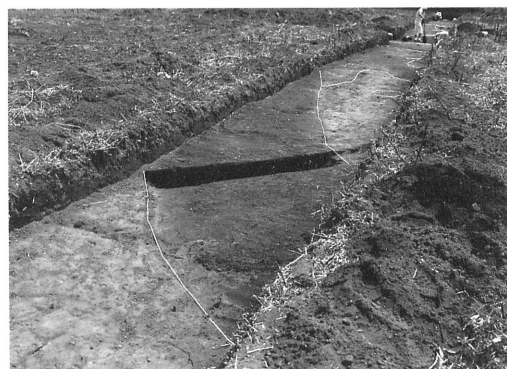
姉崎東原遺跡 B 地点



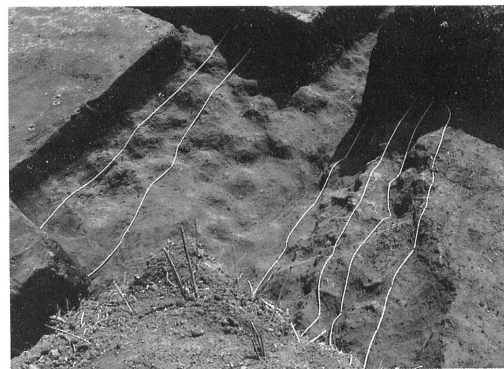
調査前近景(西から)



3 トレンチ(南から)



2号墳周溝(1 トレンチ西から)



1号墳周溝(2・4 トレンチ東から)

南岩崎多田良遺跡



調査前近景(北から)



2 トレンチ検出 住居址・溝(北から)



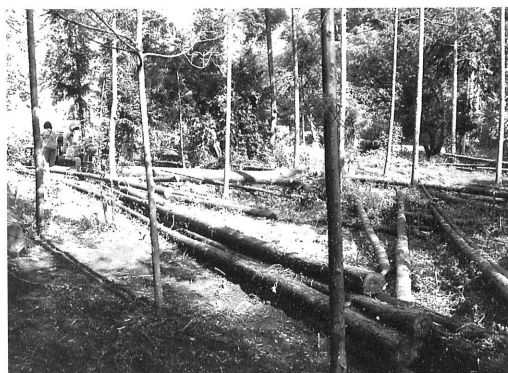
9 トレンチ検出 溝(西から)



塚 断面(北から)



草刈尾梨遺跡



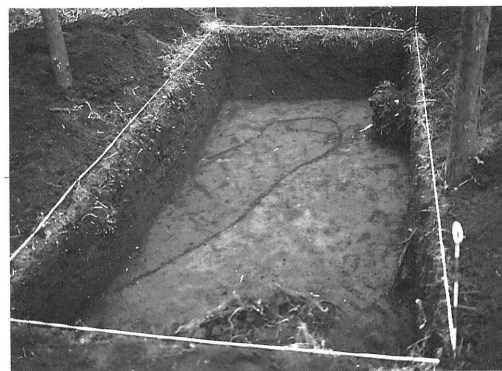
調査前近景(西から)



1 トレンチ(北から)



2 トレンチ(南から)



5 トレンチ(南から)

安久谷向ノ岱遺跡



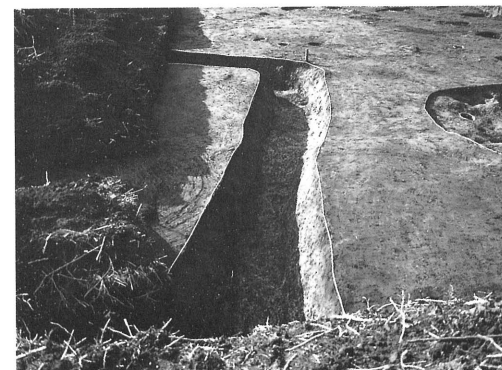
調査前近景(西から)



1号遺構(5 トレンチ・北から)



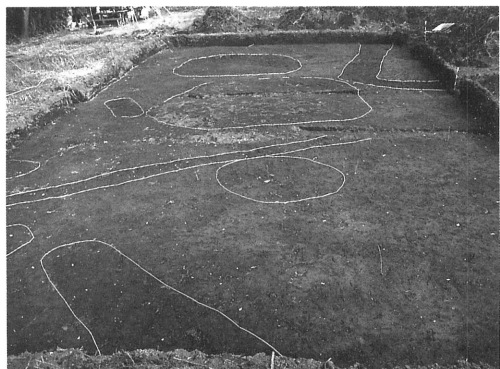
1号遺構遺物出土状況(2 トレンチ・南から)



1号遺構(東から)



安久谷向ノ岱遺跡



本調査 遺構確認状況(西から)



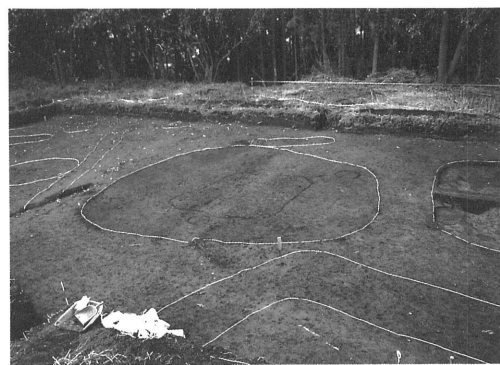
本調査 完掘状況(西から)



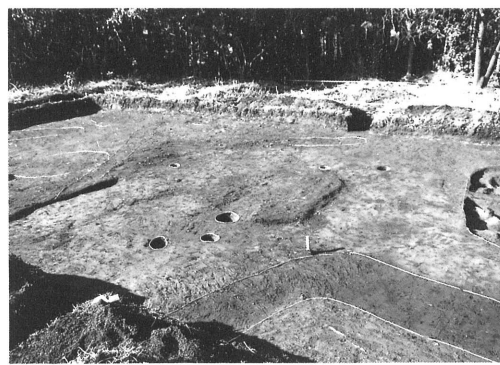
3号遺構(西から)



4号遺構(北から)



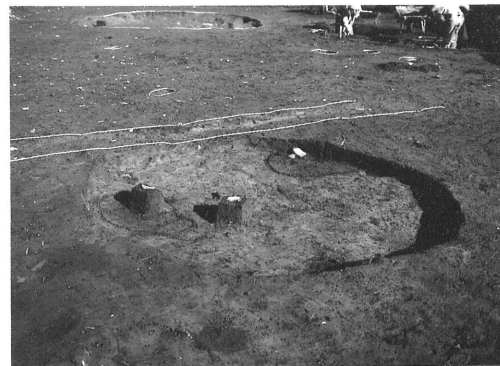
5号遺構 検出時(南から)



5号遺構 柱穴検出時(南から)



6号・7号遺構(北から)

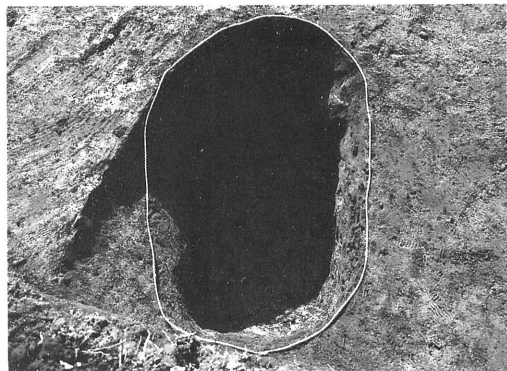


8号・9号遺構(西から)





安久谷向ノ岱遺跡



10号遺構(北から)

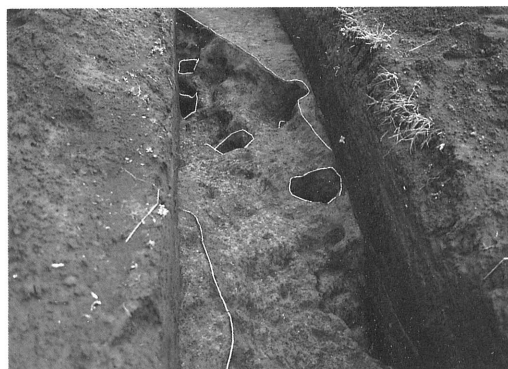


11号遺構(東から)

山田橋表通遺跡



調査前近景(南から)



1 トレンチ(西から)



3 トレンチ(西から)



5 トレンチ(西から)



5 トレンチ・テストピット a (北壁断面)



4 トレンチ・テストピット d (北壁断面)



山木白船城跡遺跡



調査前近景(西から)



土墨痕跡(東から)



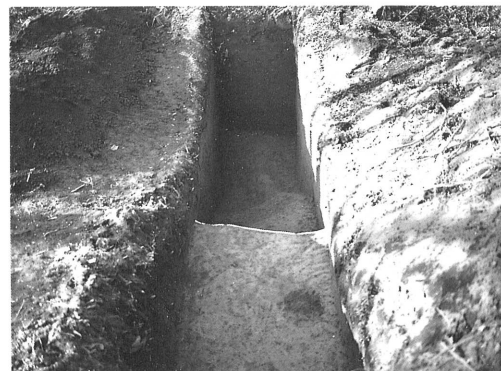
1 トレンチ(南東から)



2 トレンチ(南から)



1号遺構(3トレンチ・南から)



2号遺構(5トレンチ・南から)



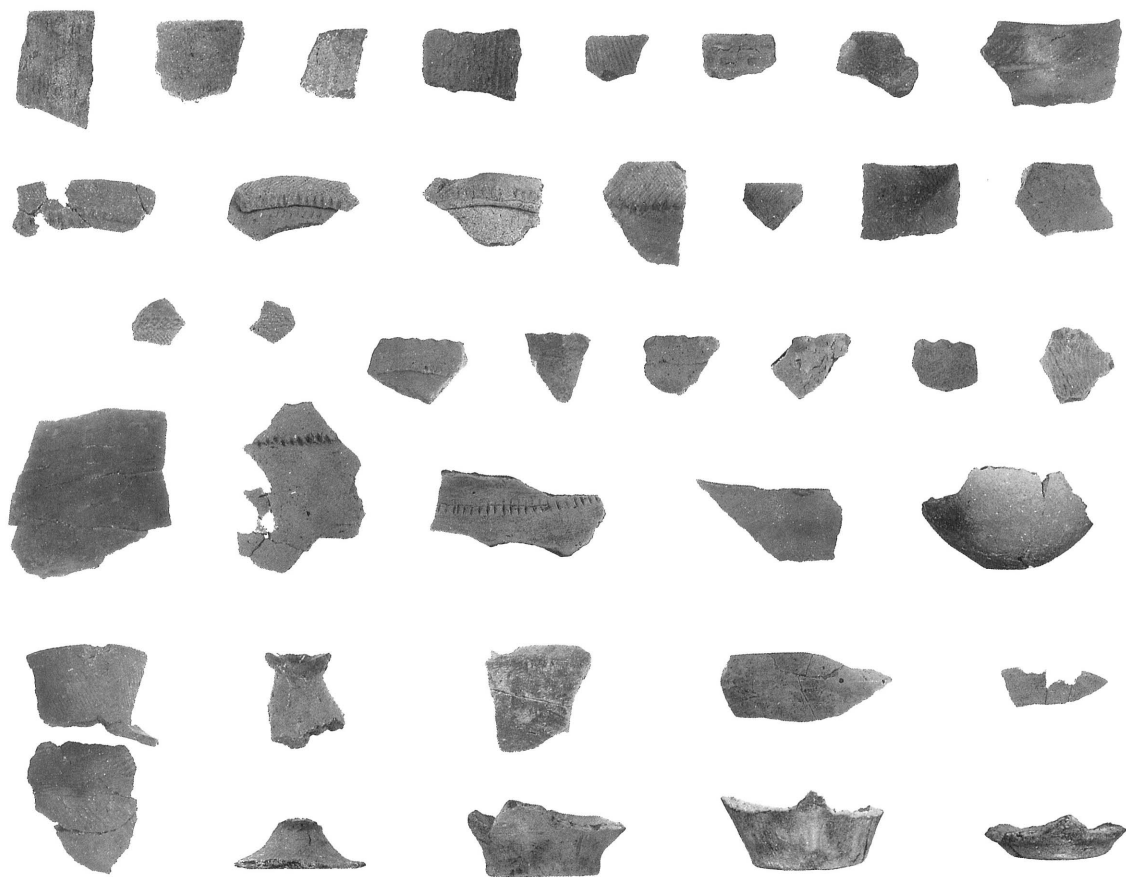
3号遺構(6トレンチ・北から)



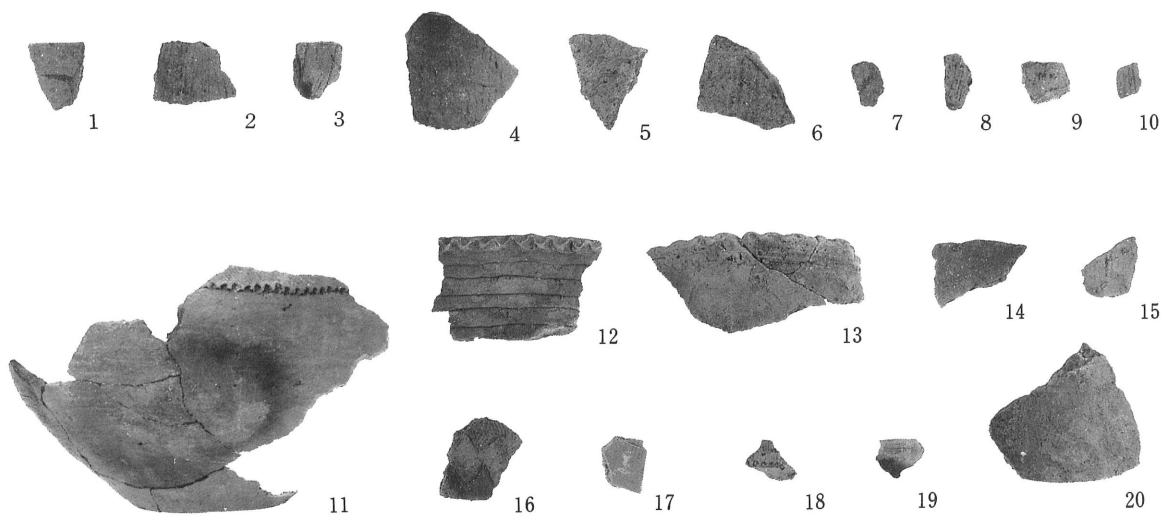
6号・7号遺構(8トレンチ・北から)



出土遺物



姉崎東原遺跡 B 地点

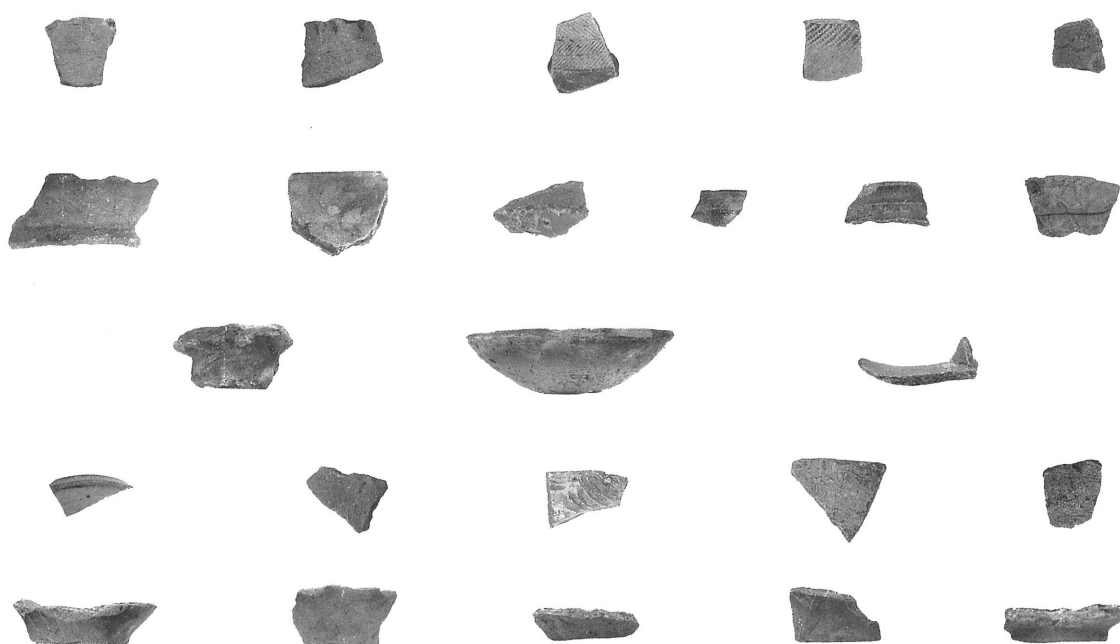


南岩崎多田良遺跡

1~10, 20(トレンチ), 11~15(住居址), 16~19(溝)



出土遺物



草刈尾梨遺跡

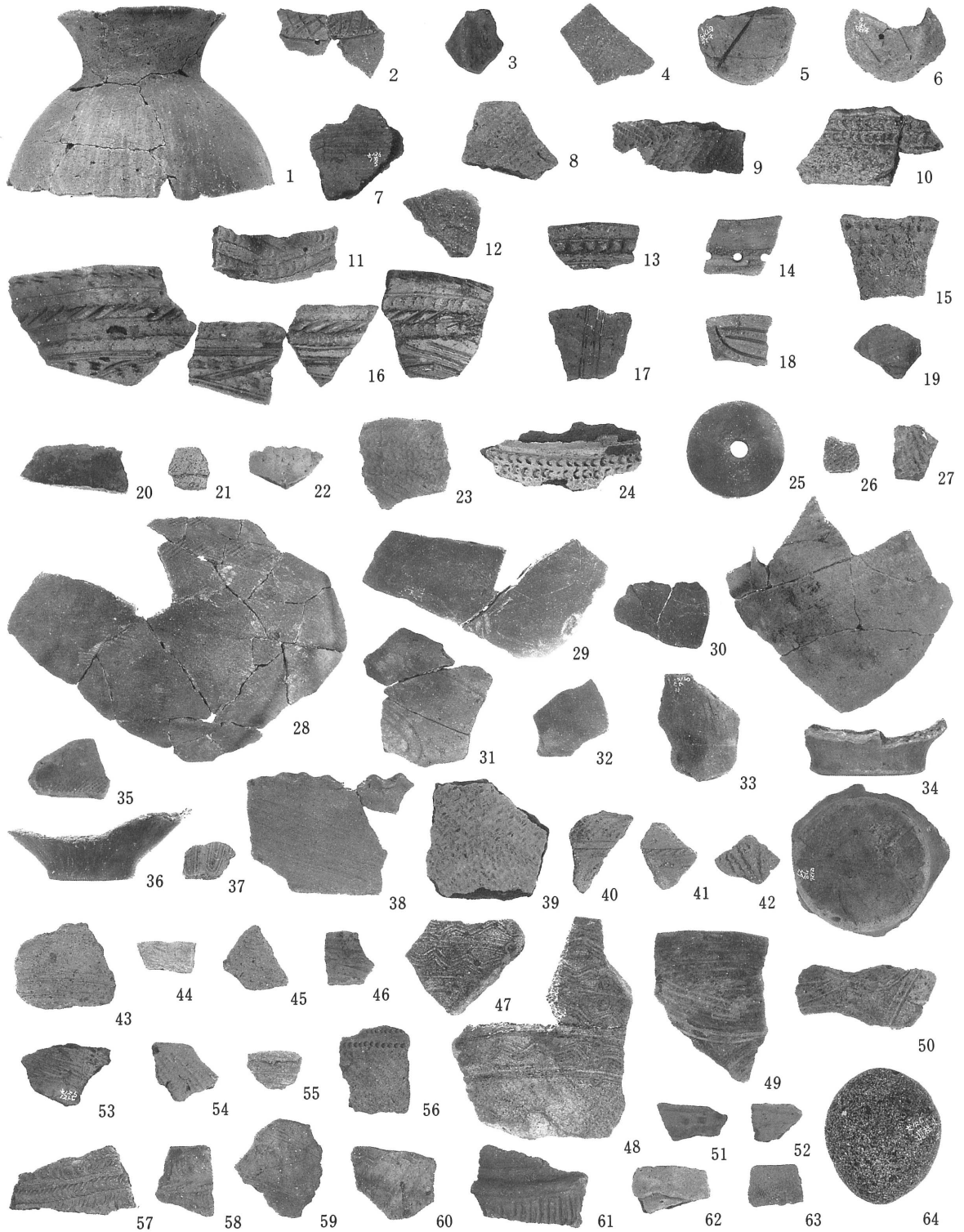


山木白船城跡遺跡





出土遺物

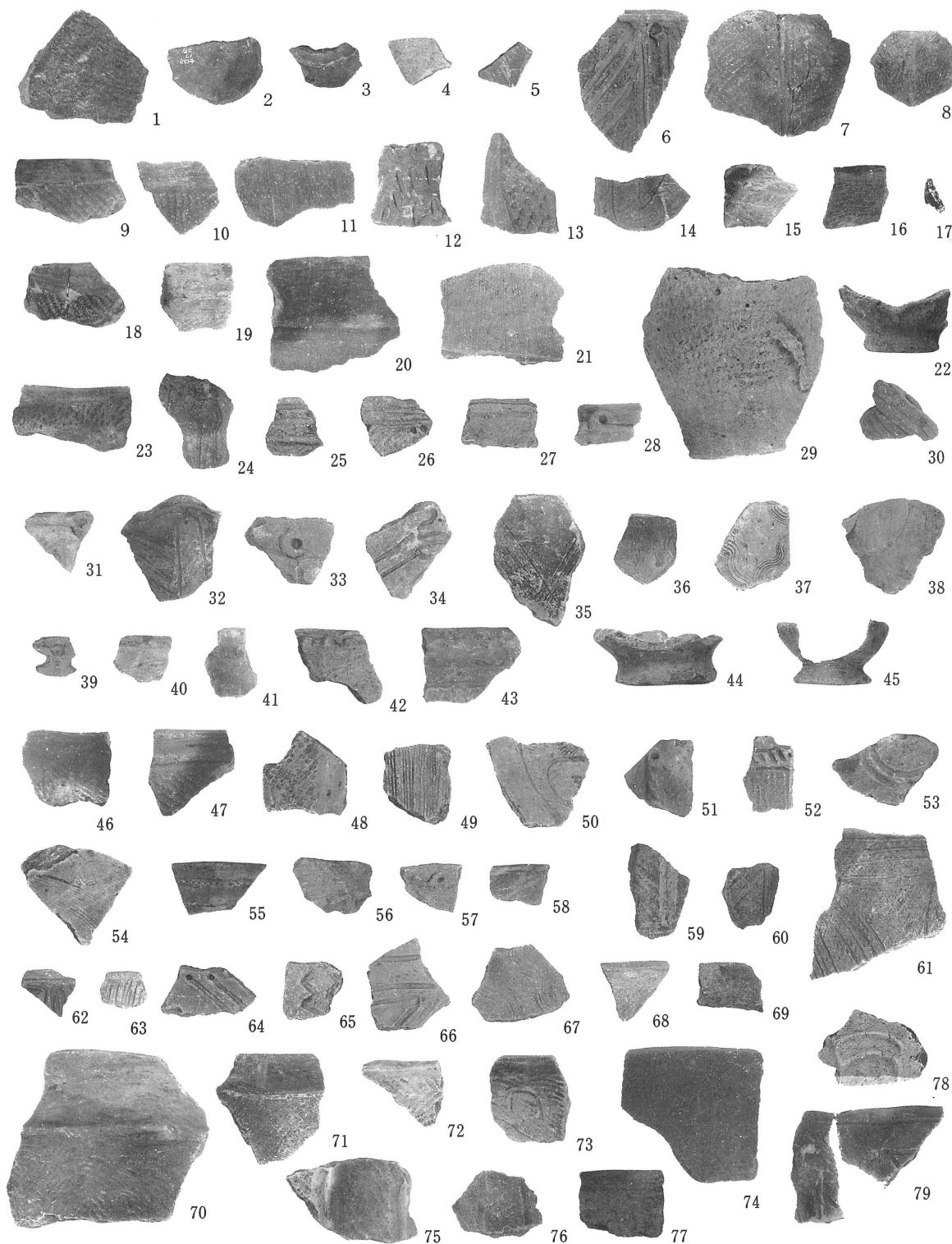


安久谷向ノ岱遺跡

1~19(1号), 20~24(3号), 25~27(4号), 28~42(5号), 43-44(6号),  
 45-46(8号), 47~50(9号), 51-52(11号), 53~64(トレンチ, 遺構外)



出土遺物



山田橋表通遺跡

1～5(1トレンチ), 6～8(3トレンチ), 9～17(2 b層下部～3層上面),  
 18～45(3層), 46～58(4・5層), 59～61(6層), 62～69(3 b層 貝層中),  
 70～79(4・5 a層 貝層下)





平成2年度市原市内遺跡発掘調査報告

平成3年3月25日 印刷

平成3年3月25日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

市原市能満1489番地

発行 千葉県市原市教育委員会

市原市惣社1040-1番地

印刷 三陽工業株式会社

市原市五井5510-1番地